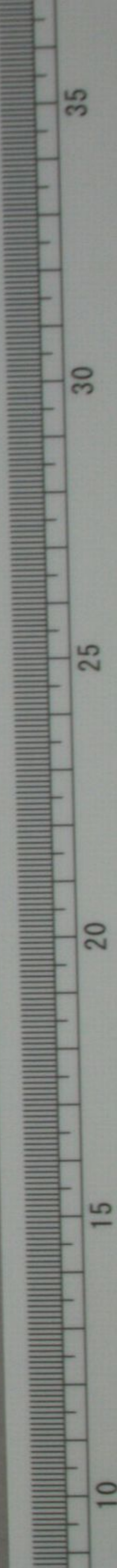


昭和十三年四月下旬起筆

戊寅坐右錄

三

特別
14
1919
493



戊寅癸亥

昭和十二年四月二十一日以降

○四月廿二日朝急ニ帰國を思ひ立ち空刻上命をふり、此の
 真時柱次郎の病を治らんともも也真時此の山年他家
 遊んずと云きし、由病癒の症を死期也と云きし、其の
 の内報を得し然る也

十一時有山を登りて懸帯の酒を飲み、其の味を喫し、十二時
 二十五分大上野より、狸坂登道に入る、地は道々高
 溪河致香をえ、金に折れ、山中、雪多く、塩津不
 出、道は四十如も皆雪下、在り但れ、到る、安極、是
 皆、草心くき、遠山の白雪と相映す、四時半
 新雪を著す



元、南宮文信筆
 竹石遊猫圖
 (笹川鹿堂氏圖)

吾も此の着後直ぐ真の家に別れん事ありしも
身突出たはつて病人を助かせるも心なまじき事
と思ふ事
の朝訪問するに決し、真の家の物成る格鏡二
方、日頃の娘ををり、真の家の物を聞ひ且つ其
時方、のま前訪問を管法より通してしむ。

翌日吉相九時自動車と廻り、河川に別れ、桂次郎に
年前家督と息田中大と、後、隠居と云き、
其前も此の時は、おこき此年、新井御川に相の折
川前とこき、
ハ今又た悔なきを得ず、真の家の別れ者直ぐ行せ
んと病室に入り、
元氣をとり、
明る余の慰問をまね、
三十一

ふ計り法流を試み、
ツリ禮の合、
此の真の家の婿、
か、
ハ、
別を告げ、
家の御命を、
揮毫、
なるとし、

千載風流興有餘、西落世塵疎多欲、語盡晉時
藝既老、月琴王氏書(版字あり他、終補を幼す)

信淮寒中、寄真岭桂次中君 梧井

既飽原野草、還肥飲渭澤、少何予氏者、不似

牧童心

前詩、桂次郎の月琴を譲りてと、聴きそむ、詩六朝風の體
後詩、其体をそめとそふ。

新河、二泊、此間、五十公野の墓を展す、余、校反、松之
舟が、鋸屋、飲む、一日、沼垂の字山の下の農園を
訪ふ、此處、近年、沼の傍うと、所を、東京と、米の
客多く、之を、買ふ、此園、十畝、ほり、あ、んか、と、思ふ、平

地、を、洋名、就中、千ヨリ、ツブ、培養、あり、砂地、あり、故、を
も、球根の、培養、あり、一、世界、の、花、を、後、一、片、の、和、名、の、説
に、比、し、遊、色、を、多く、外、に、輸出、す、今、の、花、は、多、く、を、
遠く、望、み、紅、黄、紫、白、の、虹、の、地、に、あ、り、か、と、疑、い、ん、見
流、す、根、り、花、を、多く、を、真、の、美、術、也、東、洋、一、の、花
圃、と、稱、せ、る、也、七、溢、美、あり、お、と、感、く、や

此、の、赤、白、山、公園、を、訪、ふ、昨、年、此、園、に、長、井、雲、峰、の、碑、を
建、つ、余、の、揮、毫、を、成、す、と、思、ふ、未、だ、見、え、未、だ、遊、の、城、今
一、見、た、ん、と、園、に、入、り、物、名、神、武、帝、御、像、に、向、つ、て、一
地、に、之、を、見、え、す、地、形、大、に、一、神、武、の、聖、像、に、初、め
と、拜、す、所、又、竹、向、武、郡、の、豊、碑、も、初、め、と、見、る、所、を、
訪、つ、ぬ、借、出、飯、の、三、所、之、を、改、定、せ、ん、と、思、ふ、信、川、に、雨

ある園の二三月の煙草を由つて園地擴大せん。集積二十数年
此園を訪つて問うる所の麦穂は日ごとを認めたりし

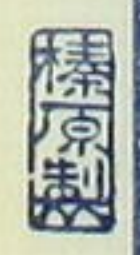
津川年子刀自

唯一人生きて
た頼山陽の孫



また一人生きてゐた頼山陽の孫、津川年子刀自は廿五日午後七時廿分女館品川區大井町三二四一貴族院議員松井茂博士邸に在りて中絶家の當主東京高校教授磯成一氏はじめ親族一同、ならびに刀自の父事庵六曲一羽の屏風に枕頭を置かれ八十八歳を一期として大往生を遂げた。刀自は山陽の長子で頼家中最も能筆といはれる事庵の末子に生れ、廣島藩士で上野影影隊に参加し、後新潟縣警部長に進んだ故津川頼藏氏に倣ひ、若い時は美筆と才智を誦はれたものであつた。

新刊の『山陽』を謝し、午睡せんといふ床上に横たひ、山刊系系を讀む。山陽の子事庵の『水報』を思ふ。此人余が『山陽』に記する『一頃相識の故郷』津川頼藏の妻たることを始めて知つた。山陽倚り、山陽の事、切り抜きて存す。床上の午睡を食ふと、得ず、指をの尾指の四角を近刊の『山陽』を讀む。上巻既とある、柱を讀み、下巻を



読後、睡氣去り、終に全巻を讀了す。政令余の
測り、三時頃時の後、とていふこと
り、号外の『山陽』を讀む。就て、山陽の
事、山陽の事、山陽の事、山陽の事、
○早命量城先生の湖亭史話余未だ見らぬ、
北あや先生の『山陽』を讀む。就て、山陽の
り、山陽の事、山陽の事、山陽の事、

「先師岩陰の話に、頼山陽の妻はもと藝妓（傍註。後放）にてありしが、至つて敏慧の人なり。吾が山陽の塾にありし時、諸君は文會ごとに前後同趣向にならざる様文思を構へらるゝは、定めて苦心ならん。妾の毎日過飯を調理するは些事なれども、類似の品を進て諸君の厭嫌を致さ

ざる様注意するも随分勞慮のことなり、など語られて、諸生の氣受も至つて宜かりし。山陽は毎夕小酌されしに、常に清潔に杯盤を具し、快意の酣醉を致さしめたり。京攝間は江戸と違ひ諸侯の邸第なし。故に其儒流皆筆翰を揮て活汗を助く。山陽晩酌の後常に快眠を取られしに、

云々卒業論文と異なり、卒業論文は一定の形式を具する
し、その一編の漢文とおのづから体も異なり。紙数
一二枚のよりあるが、亦其の文ハ筆者ニ度々
例として、山田英南の行の余の予をなすこと
て、便早ハ法律家ベンシムらの又文のあふ山
田英南(喜之助)の名を男一なる佳句一首あり

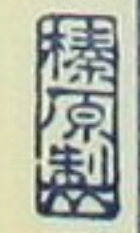
初夏早起

庭前露凝、洋無埃、階下而こ標有梅、竹筍巧
穿岩穴出、椋花斜上、女傭来

山田英南

敬宇淡

西田ハ淡村市元濱市五九三番地住也、便早ハ依の稿



ハ巻全ニ収む

五月一日記

○漢義好の七五十年祭が、何らともまんな。古来英雄型
の人物の、義絶を不滅の喧嘩と傳へ、人物
ハ、彼んハ、鞍馬の山と修行したるも、五條橋に怪僧亦度
と、とめたりも、船のハ、般元と、鞍馬のへ、
漢の、奥妙通る、彼んハ、口マンラツの、
あつて、甲法名流、此上の、好材料、と、
奥、平家の、在服、何んとも、義絶の、首切、
ハ、凱旋、を、鎌倉、入、と、
と、
得、
非、

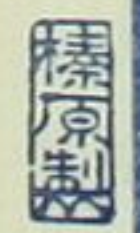
このころは、神河の法に由る記憶を以てし、

塾の中で本式に英語を教へたのは、同人社が

はじまりで、それ／＼専門の先生が雇つてありましたが、経営の仕方が悪い爲、遂に持ちこたへられず、閉鎖してしまつた。或時平沼専藏に金を借りたところ、期限が来ても返せぬので、盛に催促される。敬宇が困つてゐるのを見かねて、弟子連中が之を山岡鐵舟に訴へた。鐵舟も平沼を相手にどうするわけにも行かぬ、困つたなど云つてゐたが、仕方が無い何かして見ようといふことで、専藏を呼びにやつた、懇意でもないのに呼びに来たので、何事が起つたかと思つてやつて来ると、もつと此方へ寄れと云ふ。近く来たところを、いきなり鐵舟が手を押へた。専藏は驚いて、痛いございますと云ふけれど、鐵舟は手を離さない。貴様は學者まで泣かせるのか、と云ふと、私はそんなことをした

おぼえはございませんと云ふ。無いことがあるものか、中村敬助は學者だ、學者を泣かせるもんじゃない。あの金は取る氣が取らん氣か、催促するかせんか、と疊みかけて聞かれる。あまり鐵舟の權勢がえらいのでどう答へたらいいのかわからないが、遂にいたゞきませんと云つた。取らんのか、必ず催促してはならんぞ、それだけの用事だ、歸れ、と云ふとやつと鐵舟が手を離してくれた。専藏は這々の體で逃げ歸つた。この話は當時同人社の會計に與つた人に聞いたのだから、嘘ではない。平沼の借金は鐵舟の御蔭で免れたが、やはり経営がうまく行かぬので、同人社は自然潰れてしまつたのです。

(談話)



の余先師の事、豊城先生の晩年、處々往來したる事、
ついでとして、及んで、二三日止まらぬ、先生が
岩陰塾にありし際の事、のまき、其一行、幸ひ、森鐵三
先生の隨筆、湖亭史話、岩陰の遺蹟、を抄録す
るものと云ふ(以下湖亭史話抄録)

余岩陰塾谷氏の門下たること多年、先師の性行
ハ粗々一斑を窺へり、其昔、漢唐に出入すと最、操
行ハ一ハ濂洛ニ似たり、平素一言一行、敬由と云ふ
事、殊に人倫に厚く、少時父母に仕へし、

▲山田眞南、子五人あり、曰く、紹之助、解に曰く
 違父之志。曰く作之助、解に曰く作者七人。曰く
 呈子、解に曰く呈は呈也、筆筒、長持を添へて人
 に呈上する也、別に呈は程也、ホド善き也、女子
 はホドの善きを貴ぶ也。曰く張子、解は『行餘集』
 開卷第一にありと、眞南は法律家にして詩人也、
 多子濟々、其の命名の義コツタもの哉、(明治廿二
 年九月廿日號)

我文章

山田眞南

余は浪華の井に市生る。一狎邪の小人なり、我文章は楚辭以上とは謂はざるも、敢て李杜以下に墮ちざるを信ず、我言ふ所、一上一下、ゆくとし可ならざるはなし、性もと、放肆、されど、邪肆に到らず、孔子詩を評して、思無邪と謂ふ、移して以て我文を論ずへし、彼福澤拜金や、加藤天則や、胸中物なくして、強て言はむと欲す、名教の罪人たるをしらざる也

眞南の如く後世の時に衆流の如く記されたり。任歴が
 ある、眞南の如く邪の眞激たるものにて、淫川の如く或は淫靡の
 南と云ふ世生れに、眞南の子に、いれと云ふ女がある、
 後より就んといひ、眞南の長持を添へて呈上す
 るもの、彼自分の言、扱ひ如し、眞南亦自家の文章を
 云ふも、又言ふ自ら負あつたり。眞南の長子の今誠也、
 此奉仕すと云ふ。



○自今、頃日政界性未、維新、隣人の一福を授け、未だ國
 隣人をも及んぬ、尚ほ之の心きことが残つてゐる、隣人曰
 士が互ひに愛し合ふべきに、其實隣人を中の一と云ふ
 ことあり。まの原始的の敵目者が潜在してゐるから、兄
 へ、弟ちまゐるか或は相合はれ、極端に発する、即ち地境論
 が隣人間に起る時、極端を極める、隣人が地境と境と
 二條に二三寸隣地を喰ひ込めんとするも、用檢をせぬ
 地境問題も、銘々の権力益を志す、或は、或は、或は、無
 一身一家の小事仲むと性、法庭の中、或は、或は、或は、
 四谷河の境域論と云ふ、性、或は、或は、或は、
 ハ如き境を、或は、或は、或は、或は、或は、
 ハ四谷河の境を、或は、或は、或は、或は、或は、

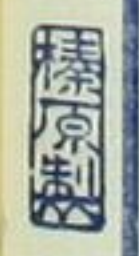
と而倒のまのちいれ一四境の長さ千二百五十里もあつて
一帯東の四境は六万三千七百二十九本の石標を建
て六本の木標を建てたがその標と標との間が四里も
あつて東の東標を今調べた人の聴くと西は十本のけ
とく残つて居るぬ、木標は腐つては身ひ、石標は台だけあり
く、十六里一本の石標もある位はさうさうく境界はあつ
ひさし、有力此の境界標は七十年前に建てたものと
露國
ハ例のト一千カを築くま當つて、要害の地はツンク進ん
居ることゝ。川が境界をさうさうとある所は、天候の動かぬ
の如くいふが法とさうさうさう、流域が性々ま変する、日本
の川といふ全く異つて、川の中がな厚く僅くもぬか流ん
ぬ、回濠は川の中央を境とするところさうであるのだから



ぬの流域は又さうさう川の中央がな厚く、舟の通ぬの中
央を境界とするところさうさう、川が境界をさうさうとある所は、天候の動かぬ
の如くいふが法とさうさうさう、流域が性々ま変する、日本
の川といふ全く異つて、川の中がな厚く僅くもぬか流ん
ぬ、回濠は川の中央を境とするところさうであるのだから

○四次の初年丸山作樂が醫術の身とさうなつたのが、一家の
生計をなす、馬喰所を豊饒の屋とさう、茶屋を
出し、さうさうさうさう、女が人から茶屋のユツ
を教へつて、先來さうさう、茶屋のまゆとさうなつたのが、初
年であるが、近刊の集古に今あるさうさうさうの切

家がある。この人はいまも紅茶と冷ますのがあるが、カヒ
らいも出すから、サヒーハウスである。自分の最初紅茶を飲ん
だのは、沈田五を、紅茶を飲む、外國教師が午めし時
自分の家から、ホーイを、運いせ、く、時紅茶七
いせ、い、つ、の、飲、り、を、飲、ん、い、う、ま、い、よ、と、思、つ、れ、が、ま、り、頃、の
東京の西洋料理店、飲り出さう、い、れ、お、茶、の、匠、さ、う
ま、の、リ、プ、ト、ン、の、あ、る、が、台、法、水、の、日、本、お、茶、の、康、便、び
あ、る、の、い、え、が、多、く、用、ひ、え、て、い、る。今、酒、物、の、い、い、飲、料、は
あ、る、よ、い、の、か、あ、る、エ、ー、ド、や、ス、ク、ワ、ツ、シ、と、名、づ、け、の、飲、料
ハ、概、然、果、物、も、原、料、と、い、う、よ、う、に、隨、分、價、の、高、い、よ、う、に、あ、る
、フルーツ、ポ、ン、チ、さ、い、の、果、物、を、割、い、て、茶、や、砂、糖、に、和、
て、出、す、が、果、物、も、菓、子、の、一、種、と、い、う、西、洋、の、れ、れ、珍、重、さ、う



こころ、あ、る、の、い、え、も、今、こ、こ、四、五、十、年、前、淺、子、を、以、て、初
め、浅、子、を、役、け、し、母、さ、ら、こ、こ、ろ、を、ま、ご、り、に、か、か、る、こ、
い、え、と、い、う、電、力、が、あ、る、の、ハ、紅、茶、さ、い、の、西、洋、料、理、店、さ、い、
の、い、え、に、い、え、の、ミ、ル、ク、を、供、し、に、い、え、の、試、み、の、試、み、の、試、み、
あ、る、今、こ、こ、の、西、洋、の、西、洋、人、を、出、す、所、の、い、え、を、氷、入、の
房、を、出、す、が、い、え、の、西、洋、の、西、洋、の、い、え、の、試、み、の、試、み、
〇、マ、ホ、メ、ツ、ト、牧、師、の、婦、人、の、顔、を、掩、つ、て、他、人、の、前、に、決、り、顔、を
現、は、さ、ぬ、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、
踏、つ、い、て、お、を、献、き、ん、と、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、
て、ま、の、こ、と、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、
ま、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、の、い、え、
先、の、西、洋、面、を、解、き、鐘、に、衣、敷、を、脱、き、め、れ、死、ん、と、未

裸としい侍女に忽ち回復したと云ふが侍女の羞恥の
即ち血脈に活氣を返して血の循環を助ければ病が愈
へばのうーい多分疾患はリネーアチかあつたといふこと
ハ医者の方考と云ふ流が日本では婦人の羞恥を利する
治療の法もあるのではある

○自今左の如き詩をいろいろいふ

木の多敷つくしと冬もまつ 跡次は拍申の聲
めづくくくけあをたまきかかんい〜いろいろの
窓の茶室白の口切の客 炉用(後醍醐天皇)
はれおろく我床にたけ 鳴きを葉の夜こそ
秘くぬ 寝くぬ供に 灯照らん見んが 秋
もす〜きも 窓に乱んて 促織(本朝文鑑)



門の紅葉に酒を尋ぬんが 春の捨て世麦前
いとや 楊のつんきく 店に寝転びて 印引音の
庭にさび〜き 山中尋酒(本朝文鑑)

壁もまらん尾の住く 枕を喜〜くあ〜いん
いん 折戸開けば 夜もつら〜き 宵の時雨
を林文七 茶を煮火の 閑居の落葉(後醍醐天皇)
まい山には雪いつのめど 野の下前もちみかち
らる 望に春日の伊をいぬる つみ菜に贈
の光にけら〜き 八日(侍及郎家集)

漢詩の純句〜の侍及郎家の改訂、新体詩の〜あ〜ま
〜
○詩集を次々今の時句と特々味とあ〜い戦術の法とあ〜ま

かき作るの敵味方も聞かず

回栗峰前沙似雪、爰降城か月か霜、石の何處吹雪

爰一夜孤人盡叩脚 唐生書

孰比何昏々、孰士如羣蟻、氣重日輪紅、血深蓬、苦禁

鳥の御人由、食洞元不起、昨日城上人、今日城下鬼、放

色如羅星、鼓年初、珠未已、感妾家夫與兒、俱在聲

聲裏

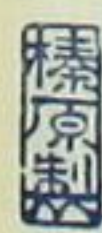
○牛込の赤坂の所、此に停車場の驛版、擬して「田子作驛」と

横書して宛から停車場の七あるかの如き、看版を出しての

る家がある、立留つて見ると可き、食弱の家、此が酒坊と見

へ、看版と見返すと、上戸堂の三つ家とあるのみ、一夫

一也



○青山の之(考九郎)ハ優福の人、ゆゑのゑ、冬に世を

し、此の龍舟の出所、どこかと怪しむところ、みづが牧野

野高の史、此の標、此の史、此の公が其の、但し紫の栗山が

取次、此と云いんぬ。

○自今、尚つて夢汀と名づけ、此のことも、あつて庭の地、

此の夢の、此の夢と名づけ、此の夢と名づけ、此の夢と名づけ、

此の夢の、此の夢と名づけ、此の夢と名づけ、此の夢と名づけ、

つ、此の夢の、此の夢と名づけ、此の夢と名づけ、

仁夢、連前漢、拜而、又指、此、如何、此、微草、在名

拂、此、龍、試着、映、此、影、正、似、飲、洞、類、

○橋徒、詩人、草、薙、燕、石、の、大、と、試、之、を、既、見、神、馬、州、

の、句、を、出、し、對、を、需、め、也、蓋、石、聲、耳、を、名、け、て、未、見、佛、牛、

二做して可き

五月五日記

○柔術治平の晩年大ボウに全力を捧げ、老軀をいさげ
 カイロの令嬢、臨人死が、帰路日本止くの船中、不帰の客
 とすのた。其の死、彼人の使命を果して、ゆがみあつた此の貴
 族、あつたといふ惜しい人を生つた。●運動界、入行りの人
 があるが、あつたといふ大家、他は、其の、彼人の一生を、自射力、養
 成、捧げ、彼人の柔術を、復興、更張、する、空前の、成切を、捧
 ぐ、この、彼人の、あつた、死、を、惜しい、事、である。彼人の、東京、大志
 の、精神、を、修め、ると、共に、早く、柔術、を、普及、治平、する、と、云
 ふ、その、柔術家、として、天下、の名、を、轟か、した。彼人の、柔術の
 理、を、口、舌、で、説く、の、む、ろ、く、柔術の、技、を、自ら、する、人、が、あつた。
 吾等、大志、を、在、つ、時、より、大志、を、立、て、戴き、肩、を、張、つ、て

校門を出る姿を見れば、人の即ち、柔術、であつた。彼人の、後、海邊
 館、を、居、座、を、設、け、て、只、門、人、或、者、と、ま、ふ、物、も、及、び、終、つ、海
 外、まで、此、技、を、傳、へ、る、事、を、あ、つ、た。昔、柔術の、成、え、る、時、は、
 柔術の、如、く、此、道、を、断、つ、け、る、更、張、し、る、無、つ、た。柔術
 道、の、内、に、技、の、心、を、横、道、と、よ、ぶ、事、も、あ、つ、た。武藝の、業
 道、世、の、中、に、法、を、そ、の、側、に、修、養、し、て、習、つ、た、者、の、成、切、と
 して、全、く、修、め、る、の、外、に、な、し、る、事、も、あ、つ、た。彼人の、柔術、を、
 傳、へ、る、人、が、あ、つ、た、時、は、射、力、の、強、健、い、あ、つ、た、分、に、四十、年、は、
 前、に、糖、尿、病、を、罹、つ、た、時、に、い、つ、た、彼、の、一、家、の、運、動、治、平、由、て
 病、を、治、した。其、の、自、今、柔、術、を、行、ふ、れ、こと、が、あ、る。彼、の、
 糖、尿、病、を、治、す、る、に、運、動、を、味、と、し、て、不、誤、つ、て、あ、る、自
 分の、空、より、運、動、を、以、つ、て、治、法、と、し、て、毎、日、一、時、間、室、内、に、全、身

年江戸より大なる落雷あり。七十ヶ所其害を蒙りて、**太鼓の茶**
が破れり。田原左衛門方を訪ふに堅靱の草を求むるよ
が相踵いた。馬強左衛門の七寸考へて手をおつに、好草あり
く、字く都下の織面皮の係るを求むると云ふに、此より
羽倉岡中の、襦袢と題す文あり。正室子規が長く病床
に困れば、襦袢の二書を見ぬ

一人間一匹

右返上甲侯、但時々幽室と云ふを出入り得るやう

以特別清文并のとり下也

明次三十四日 月日

地水火風清中

人間瘡業の備考

○全塊と四庫に納入せしむる運動が始りし事、今日を以て
丸と扱ふ言を廣くしりしに、日本邦の徳教が平定し
只の所為の全塊を提供し、其時に出る事、このこと
ふ、この「教」の教の窮し、初めし行ふべきこと
で、今に其時を以て、斯ることをもし、其時集まるよ
ハ、決してまゝといふこと、斯ん切らめ、斯やうな、甚に不利
傷し、其政の形を、其時集まるやうな、甚に不利
がある。

○松平頼壽伯ハ軍人後援會を長であるの、昨今久也
こ出展して、傷兵の看護を見舞つて、昨夜宴會
席で、其の挨拶を、其の病兵を収容する、
所ハ千五名、及び大抵七八名を収容する、

病兵二一と言ふをわける事ハ利度不可知のこと也、先分病
院に入ると、漸次けちるうじ大心未意を告げり、まんが
病兵全体を通さることなるつて、若く、まんが、院長の先
導び、病兵の前を無言の通るまじの事也、
可き不愉快のこと也、此の訪問あり、若干の兄弟金を持来
するが、まんが、病兵が、ある云々、

輕傷の病兵、勝利の途を許すも、あまが、彼等、性々
娯楽、登つたりと、取扱が甚し、雨倒いあると、何分
世慾の旺盛、年輩のもの、たか、花嫁やカヒー、女
か、見あふ、侍、袖を掴り、ハンケチや、コンパ
を、呉ん、と、求めたり、取扱、が、余り、あつ、い、の、地、行
の、見、舞、人、禁、物、と、云、ん、て、め、と、ん、左、中、あ、ら、う、

○書物屋の自序が、あま、又、人とも、つて、大、名、を、得、た、り、の、事、
其例ハ、少、く、も、ま、い、佛、圖、の、文、喜、下、ナ、ト、ハ、フ、ラ、ン、ス、七、書
物、屋、の、子、だ、し、我、邦、の、持、本、梳、高、七、書、物、屋、の、子、だ、し、支、那
の、佛、悞、^(福寺) 高、七、書、物、屋、の、子、だ、し、

○西村文則が、あま、行、の、雅、志、ハ、長、井、平、信、の、す、り、を、書、い、て、ん、
と、較、べ、ん、ん、平、信、の、す、り、既、刊、の、地、志、に、書、い、た、こ、も、也、
の、り、か、同、し、こ、も、を、採、取、す、こ、も、が、い、や、だ、先、次、物、者、の、即、白、山
公、園、に、述、べ、ん、ん、余、の、押、巻、を、刻、し、ん、ん、と、一、次、に、其、際
の、感、懐、に、す、り、と、一、文、を、呈、し、ん、ん、^(高、七、書、物、屋) (五月七、日)

○世界大戦の時、獨逸が、兵士の、為、り、賣、娯、場、を、設、け、た、こ、も、が、
西、部、戦、場、に、異、状、多、し、と、云、ふ、書、物、出、て、み、る、が、日、本、今、次、の、
支、那、戦、場、に、同、下、こ、も、や、つ、て、あ、る、と、又、一、文、を、呈、し、ん、ん、設、備、が、

することか実際さういかにむちう様もさる富の差かある
そんなら末の柳樹摩檜もさる。漢家の千々二一の煤烟
が庭樹を侵したか、漢家の樹木の枝が日を遮る煙
を妨げることさう如き鎖うりことが、漢家同士の喧嘩の程
●とさるることさくさくある。思ひ出すの、下村大丸吳服店が京
都へ退く店を改定したことがあるか、漸次を拂つて西洋
建築を掛け、特に建築物を銅版の包人にして、日本
固有の建築の連の養柳比である間、何の尺数に調和
するやうに、特子漢家の苦情も留められたか、
つれ。

中々の研うらゝゝゝ 夢の夜

遊人のあゝが研をけるるり

高思ひ出さくも考まつける改定関係も漢家の互ひあ
及目すること知れぬ、田一ことか漢村が及目する、こと七ある
改定より数多の成りたる、一村悉く二堂に属し隣村
が全村他堂に属するやうなことを、古堂ありて、自今も
九と云々、一の夜中及別派か、二の記
を及けること、三の車と等、四の堂の記
ある提灯を減して及別の村と通さる、五の
苦業相済の事例、六の監獄を漢つて、七の
樂坊行、八の成形を、九の監獄を漢つて、一〇の
かあることと思ふと、一一の心地か、一二の
して漢家の信教の清くを、一三の心地か、一四の
い、自今に、一五の心地を、一六の心地か、一七の

日本の戦国時代を想ふと、滿洲の抵抗敵國はあつたが、問津
の入りこゝろを恐るゝ僧侶はさへ入ることか出来なかつた。但
し、彼等はあつた。行宗の僧侶はけい、じんを家ひせ入り
込め、特格を有してゐた。絶つる當時北京の僧がた
天下の形勢に通曉してゐると云はれた。

今の世界の隣國の敵國はあつた所が少く、さうさうの。四境の
堅固の要塞があつた。往々不可侵條約が結ばれたが、ま
か確保せんずい、まゝに戦ふ場合が多いのは、歴史が物語つて
ゐる。

敵對國の近傍に在る國は、中間に住まざる國土を以て、或
のころ無名の國相争ふ時、中間の國土は、其戰場とな
るが例に、甲械の戦多し、行流のいつか戰場となつた。

一八二一頃の事、行流のいつか甲械の戦、其戰場とな
かに或るふ。信州のいつか隣邦を持つたつた。

○金塊や金の地金を買上けて中央銀行に供給する運動
が、ある日、そのついで、日本の概算の日々の切り
扱と巻尾に附して、自今、其の効果を疑ふの、前頁
の種、所見を述べた。金の全國の積存する、いつか
あつた。其の相ある、工務的の金を用ひた。少く、さう
その相違する。金庫の金、塗金の佛壇、蔭繪、
その類、相ある、あつた。が、その日々の取扱、
以外の、その、市実金の、繪画や、装具、用ひた
て、金の、その、あつた。志の、北条の、その、地
と、その、あつた。京都の大丸屋、其の、其の、

手離さぬやうな場合、即ち政府が壽命をわけて折るとも
私を許さぬともいへば、迫つた時こそ、極点を越え
集かぬものか、切らぬのが、是うして決して巨額の上の
ごまかと思ひぬ。日交教の時の時、何れか、圓債を差
つた方便として、南林花相の日本、折から大金、餘り
せん、支那流のうそを立係をやつた、是の功を差して
此と云ふものを、自分等の金物や時計や指輪等の珍
々たるものを集めて世界の笑を浴び、痛くもろい腹をさぐ
らんと、愚の骨頂であると思ふ。

ユリナキをもちろつて、當て日本橋改修の御田中智之が
此橋の江戸の忠王代まつるもの、他金の擬定
珠を心へいとま、其の運減る及んぬ、採用

さんまうのいすしと想ひ起す

○酒後客と云ふ、客の季の句を云ふ、予曰く、今の来見
金を教する時、芭蕉の「菜畑の花見、顔ぢる在こゝ」
と云ふ、流石にうまい。五月節句の鯉の、横を内、お守
ハ、舞鶴、こゝ、日本男子、あつと、と、あつと、食
味の、狭く、移り、客の上、何の雁、鶴の、す、雁、鶴、
の、店、あつた、戸、肉、大味、牛肉と相、あつと、あつた、今
思ひ出すの、肉、鶴の上、何、鯉、節を、フン、ダン、に、かけ、
出すのが、特色、あつた、旅行の、思ひ、去、余、山、出、里、都
の、溪、谷、を、決、つ、た、旅、行、に、小、舟、を、開、いた、時、東京、から
稼、き、を、た、た、け、が、席、を、侍、した、フ、ト、其、故、の、姓、を、問、ふ、れ
ば、何、故、か、巻、を、踏、踏、した、強、を、受、へ、て、見、る、と、彼、女、の、着、て

レバく考ふるのをすくと般若と云ふも聴き一夫一
ハ、故ぬの家●の佛河であるのか斯く姓があることがわんた。
客別甲子の日不忍池の井天と書き木綿の駄布を
賣り出すが、特に黄色の裂を用へる何故か、余常々其の
件由を多々合黄金と表徴するのむあるも。後、日支の
戦争は漸く、客を今方の戦争より彼等ハ漸やくち
龍刀の用を為さるることを切るが、今次の戦争ハ
肉羽の愛兵も影をぬめりうと予甲く、彼んち龍刀ハ
うして漸やくサレべも用ち、而して我んハサレべも
と日本刀を用ち、其の度(遠)見ふべしとの流大卒の
御おん、身にはゆけかするも、**剣太刀**と云ふ心
んを大心とすと聖訓の如く大刀ハ復興一と云ふ(五月)

五月

十一日記

○明治年細記といふ一枚摺るの明治初年の落首的聯
句を美へたものがあるや、其時のおまもあつくと示し
以上のと挿入するに左の如し

- 一 此らと云ふ人はしめて歌をいふくす
- 一 二足三文の賣家に尻尾を焚物を堆くす
- 一 駿河の武士尻をはし折るに在る姓いひは困る
- 一 ぜんきりあれまはやも好む後窮る迷惑
- 一 蝙蝠今用れらるる不忍池もろと里とるる
- 一 おいこみ横行もお持きん玉を信ず

- 一 函所のちん後所前いのやまおほいさま。
- 一 新多代愛でしんて人持本床の百ますいけ。
- 一 東条より横濱へ行く日々の蒸汽船始まる。
- 一 日本にも胸に穴のちいれ人出来る。
オランダの船
夫殿もいそが
- 一 大川の橋々元柵を構ひて馬車も止む。
- 一 だんぶら行いんて雪隠に行くことおつらう。
- 一 印の籠引出し開居しどいんづのうづまき廿六の
- 一 性累の士多くハランケウトをはさる。
- 一 シヤボンの白ひきうーて監督の装束とりとてんふ
- 一 横濱ののげ山ん時の鐘はしんやう。
- 一 早つけきもえ出いいうち代口をうめいんてん
- 一 緋をどくの鐘まんていんはいんをきかせる。

一 ほう貝道り屋に隠れしうのべい世を譲る

一 鉄砲を高小舎はしめて花所に出来る。

一 町々木戸とれせつんまし所をさる。

○ 自今いつとや我邦が天恵の國とてそのる春あ候も四季あ
ふことと云ひ四季の轉換が景観を變化をせし。植物界
も亦も四季を信を受らるるが景観を大なるに多し。此を
あるまじしを感心しが日本ハ暖帯地であるのちい。氣候
が極端にうく中庸と得て居るはう。オランダの景もあ
のちいである。いくら景もあはうも四季變化うらうこと
人ニ飽きか来ぬぬる景との感し多し。熱帯地方
との別ちそんなある。熱帯地方の常夏の國である。
州木のあはれしん木ハ室をいんてきかぬ人をも没するいつ

北帯緑色のいづれもある。暖帯地より異つて暖く奇卉
が多く、樹木の葉は互に三尺と云ふ大きなものもある。蔓
草は樹木からみ着いて、森林は草の茂る所は多し
人から遠ざかるやうな所は、樹木の壯観と云ふは、壯観と云ふは、
かまひが、東の暖帯地の如く、春は百の花が一齊に咲く
星観もよく、秋は、萬木赤く紅葉すること如きこと
ハス。花は、樹木の如く、葉も、其の樹の持つ花を
花し葉を落すのは、暖帯地の如く、一齊に咲くこと
といふ。秋は、本葉は葉も、冬は、葉は葉も、咲くは、怪
の如き、大きな葉や花や果實が、刊つて、實もある。果實の地
は、葉は葉も、暖帯地の如く、人を敬む、樹も、葉は葉も、葉は葉も、
熱帯國の人の如く、暖帯國の人の如く、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
其

北帯國

探検の草木は、ジャイアントアサヒの葉は、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
いづれ、壯観といふ人も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
のよが、グロテスクな、大味の、濃度、極端である、といふ
新陳代謝の多いから、他國のものに、移住しても、葉は葉も、葉は葉も、
八目を敬む、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
す、といふ、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
か、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
見、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
いく、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
あ、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
の、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、
ハ、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、葉は葉も、

記あり 多分集云々

熱帯植物の樹木の概ね楕圓形を有し、その中には
葉の形がさざん草の如く、日輪を呈するものも、
熱帯植物の概ね全縁を有し、鋸歯を有せざるもの
も、この熱帯植物の特性をあらわし、鋸歯を有するもの
は、其の多くは、例へばアサガラク、インヂカ
あふき、等々、樹木の如く、平がジャワの樹木の油を
一、九十九種の植物の概ね鋸歯を有するもの
僅に三種あり、他の九十六種の概ね全縁を有するもの
之を本邦の植物の概ね鋸歯を有するもの、例へば川上流の
第一、北海道の森林の木同様に、去るおとしの植物
の概ね鋸歯を有するもの、五十種あり、全縁

2550

るもの、僅に三、六種の概ね鋸歯を有するもの、
森林の木同様に、去るおとしの植物の概ね鋸歯
を有するもの、八十七種、全縁を有するもの、三十二種、
一對の三、六の比例を示せし、また鋸歯を有するもの
植物の概ね熱帯植物の如く、寒地に生ずるもの、
は、其の概ね増すもの、白澤氏の同様に、八十七
種の概ね鋸歯を有するもの、八十二種の概ね鋸歯を有するもの、
また、その概ね鋸歯を有するもの、三、

北の果の概ね注家：種々の説あるも未定説あるものと
し、
この果の概ね注家：種々の説あるも未定説あるものと
し、
底の概ね兵變、罹つた全の字家の旧邸地を、

栴岳の言降りそ、田に花をりて

しう乱唐ぬらうを妹かきし

田子も元日系状しとてさかし平直の筆巧を弄
せむとも、跌宕の致ある一扇の句云く

極さく大日本を日本ぞ

内は信守の句云く

えりや一系の六才中士の山

難懐り、こゝろ日本男子あり

○高き日、時局の為り金塊蒐集をやつてあるが、現未のよはかり
て、元んとする足さぬいがか、其逆の時の軍用より、各かん
金塊を埋花し、例いさくあるが、前の家主といき、冬高の
さ、咲まんておれぬ、貴金金の隠蔽の方、は、五分さんておれら

屋根瓦が七百萬圓

金と鉛で葺く前田侯の菩提寺
豪華を誇る端龍寺

【富山電】明治年間前田侯が先代利長公の菩提寺として建立した富山の端龍寺はさきに國費に指定され、修理費八萬圓をつひやし去る四月末完成したがその様

御堂に葺いてある鉛の瓦の金重量は二萬斤である、これは鉛だけではなく、多量の黄金が含まれてゐると傳へられてゐるのでこの修理を機會に分析したところ鉛七十五パーセント、純金二十五パーセントを含んでゐることが判り今度の修理にはいつそのこと金だけを分離してといふ讀もあつたがそれでは國費の價値がなくなるといふので全部をそのままにして修理したのであるが、建當に前田家は幕府から賜まれるのを慮りに鍊用として鉛を鍊用金として黄金をその屋根に隠してゐた

い、即ち左の泥り
のぬきのしんを張る
し、ひ、貴金金を鉛
混じり、且菩提寺
の料、窓の屋瓦
純金が二十五パーセン

ハ鉛とんせのひを、え、純金が二十五パーセン
と混じり、時侯に引互に七百萬圓の
價格の瓦と滑る、勿論名古の瓦
と、比、敷、る、ぬ、大、き、な、ま、あ、る、も、
○端龍寺が歌人にある宇都野研と
その人が白鼻毛を抜いたのがもとが面
び、死んれと、毛を吹いて傷を求め、る、ま、あ、る、毛

板にて死を求むるといふ人、鼻を毛に減らんに振く
ふかき、此以街頭を歩くと、度々唾を吐くよ、
と標示してゐる。五六十年前不便と云ふ
人此時代があらぬことを想ひ出す、
生に害あるといふ思はんやうの、
思つたのれ英吉利がやうやく礼葬人も
つかへて来たやうに、度々は今の所患
の本として思はんやうの。

○鶴齡千歳は齡萬歳と云ふ女の知や否やを
つた由を、上古大椿は八千歳を以て春と
つて秋と云ふと古者も、
志か、材木の壽命の事、
長きものあり、
植物

長きものあり、二三千年の長壽を保つものあり、
と、樅、杉、位も多くと、
ソニヤは五千年の壽を保つと云ふ、
と算するも、
し、大槲、
を以て、
死、
へし、
歎、
年三千年の古と云ふ、
ある。日本、
を切るの材も、

ん、天然記念物としてその愛護を要する所以也

三宅雪嶺寺等同家の舞臺に祀るもの、某村の沢
上見の別荘巻書に祀るもの

○日本への割合に老樹のふちも多し、霊にふちも多し、侵す
可くも為すか故也、何んの村落に入りても老樹の所在を尋
ぬん、神社の境あり、往々老樹を神体と爲し、
如細繩を張るも尊崇するものあり、此等の老樹あり、往々
の傳説あり、迷信に属するもの無きもあらずと云ふ、之ん
を尊崇するもの偶あり、其の樹齡數百年、
すゝもの、神社や不在、市邑の僻處の時を同く、各戸
父祖を祀るもの、此の老樹の外なきか故也、あるもの人生
の歴史を默視して生けるもの、此外あるもの、天然

記念物保存の要あり、此故より、熱海の日本の宮に
懸たりの大樟、五山あり、今存する二樹のみ、
未の宮とまの、恐らく木の宮とせん、
休とす、又、
難く、若木の銘木の、
の法或ハ四境、張る枝を伐ること、
とす、
とす、
リ、
、
を埋め、
の書、

美名と云ふは洋行十三年の長きと道人に、其の教育の爲め家
族を費やすこと少くとせしむ、勤儉すく之んを辨むれば、
此家の如く受けしお救ふ、而して浄穢せられた。此の子弟は、
激烈のよめ、或人と地味大地主の代表として謝つたとき、
親があらぬ、不當に虐めたる此人、最終の勝利を得るといふ
へ、其の苦と其の笑ふ所、軽少が無つた。此人の勤儉を以て
して晩年家道の振り、時勢の抑壓之んを然り
めれば、是れもまた、其の苦と其の笑ふ所、其の苦の感
きも得ざる、而して後、子弟を兄とす、十の八九皆
産を破るもの比として堅固斯人のこと、甚し稀也
随つて只長ね逝く懐惜と極くす也 五月十六日記
○草不変態、形のものある、強ち珍しくす

いかに、えん自然に成るものと、人工によるものがある。人工に成
るものは、学術上価値があるが、自然に成るものは、研究資料
ともなる。是れ、天然記念物保存の目的で行はれ、植物を
考へ、初めて採つた、枝垂栗がある。この古栗は、
出てみても、葉の形、千曲の葉、逆さの
花、枝、記してあるが、植物学上の注意を怠
らぬ、に念物保存が行はれ、かられ、三好博士の言ふ
し、枝の葉、下つた、柳や桜、さあ、あつて、散れ、
く、く、く、枝垂栗の、珍しく、此の産地、信濃、美
濃、尾張、い、説く、信濃の某地、澤山ある。一日、
この柑、埋め、ある所、七ある、その、葉の、葉の、
ハ、柳の、細い、軟かい、軽い、枝が、垂れ、す、葉の、枝の

曉斎の詩を以て日記を綴り、其の日記の世に傳へたるもの
多し。辻曉村の云ふ所の、曉斎の文を考へること加へ
未だうらやまを給む者のいと多し。或は然らん、家を
二松浦武甲の宛に、証文風の書簡一通あり。文章
よく神つて指さかす、文を書かぬことそのの程に
とまらぬやういふも、や松浦の孫なる人の語に所
極み、其の書簡の武甲の部下を名を伝へたるもの
り考へれば、あれと云ふは、曉村のたゞふたふた
かたし、
驚

○松浦一右衛門の詩あり云々

松頂搜身羽放豪、望風百鳥恠思飛、世間亦
有鶴巢不害、安得炊君一攫塵金

松浦

こゝに應の詩上乗るものあり、又後にも急應を發行せし
題すんき歎

○萬葉小行の詩帖を名す詩云

天の雲氣未全消、靴履無都る邊、板橋江村
应有魚蝦布、此の務庭遊人語

曉天江村の詩の、其の尤も、然るの如し
の花菖蒲ハ東洋故味のものと、思つてゐると、外國に
之れを栽培するに、盛んじ、米田や菜園に、アイリス、楊梅
か多敷い、其の但し、松浦を考へり、同考が出版
せん、其の展覧會を開き、送るに、書翰を掲げたり、
あつ、其の尤も、日本の花菖蒲を、視察する、未だ人々、
日本産の勿論、西洋へ行つて、此の草を、見し、自分も、

の「羨やあきき」といふ。科名の辨けまらうつれ若しは紀行
ハ平凡であるといふ。醫者の從者のある人々の紀行は
へ、然る者この去来の着眼が、橋南翁の地誌の
より、東西遊記の如き其の一例である。旅行の目的も
とまどくはあつた。紀行の歴史的に歴史地理の
が才一足あつた。行程の支度、あつた。志を
理や歴史を稽査すること、むづかしいことである。
科学的知識、おもしろいものと、得べきものがある。セメテ
植物地質の知識、持つといふ。中々、教
の程、くさしや、高の、旅中、実物の、草木
の何れ、地質、地層や、岩の、何れ、位置、的、種、
いふ、法、が、あつた。思ふ、大、の、種、の、植物、

植物地質

教つた。實地、の、後、より、主、に、いふ、更、に、一、段、深、い、
進、歩、を、あ、げ、た、。

全然、科、名の、知識、の、い、ふ、よ、う、に、旅行、の、唯、に、景、美、の、採、集、
を、快、と、する、の、み、だ、り、絶、望、と、する、よ、う、の、眼、に、快、感、を、
覚、え、た、こと、も、あ、つ、た、。紅葉、の、赤、く、新、緑、の、青、い、と、ま、
り、美、ま、る、う、み、だ、り、他、に、紅葉、の、う、み、の、紋、等、の、爪、痕、を、採、集、
の、形、容、を、と、り、し、て、詩、想、を、鏡、に、映、し、山、の、形、を、い、つ、し、
淵、の、深、し、の、端、に、激、し、元、泉、の、長、し、雲、烟、の、迷、ひ、を、い、つ、
み、過、き、た、。彼、等、の、山、を、望、む、火、山、の、噴、火、を、い、つ、
森林、に、入、り、て、其、の、材、種、を、採、集、す、や、何、れ、の、所、を、い、つ、歩、
草、鞋、の、履、き、上、つ、花、の、僅、か、に、意、を、注、ぐ、の、み、
灌木、や、雜、草、の、採、集、も、一、切、目、を、寫、す、し、て、従、

過き去る、北の盲目の旅行と何んを遂げん之んを彼の植物家
の行李の樹木や路傍の雜草や鮮苔地表の微と云ふ山意を
注ぎ、採種を採り得んハ大聲叫喚と叫び、随つて得んハ隨て
収め、携り帯り箱便り湯つとを大収獲しと云ふ其の言程を
採らん為めハ峻難を厭ひず、幾動せしんハ食を廢し、動せず
九ハ露草、死から軍人の敵と對する如く、神祕を征服す
るを以つて大快事とするや、此せんハ其差らざる天懷善い
らざるよあま、勿論親克旅客ハ専門家ハ做へと云ふハ無記
ふ要求も、敢て敢て望むと云ふハ死何ハ科考的ハ
讀みとん、然ハ一里を行くハ退屈もするや、風星雲ハ
別と得る所也、ハ爪星を採るハ五里を行き十里を行く
ハ爪星と採着す、其ハ行程ハ唯ハ歩々汗を點するのみ

何の興味も乏しいハ、盲冬旅客ハ、一齊ハ體檢する所
ハ歩々道傍の藪ハ北背ともあり、今ハ山嶽登攀家ハ
山の頂を窮するハ直に山を征服し、此と後等ハ山
頂を必窮ハし、其ハ後等ハ他ハ別ハ其ハ後等ハ木枯ハ湖
等ハ山の巖を為す、其ハ微ハ草木、鮮苔ハ至ハ其ハ窮
むと云ふも、其ハ征服と云ふハ其ハ備上ハ沙汰
と謂ハるも得る、唯ハ科考者ハ乾坤の極秘を窮
むと云ふも、其ハ征服の辭ハ許さへし、旅行者ハ
從再ハ名山大川を過く可く、斯ハ名山大川の冒険と云
ハんも不可く、偶ハ感ず所也、此記を作る

なるの軍兵を以つて、思ひ切り大...

陣地戦機動戦の妙

六十里の死命を制す

ベルグ戦に於ては露國のサムソ...

南方海州のわが作戦を包括する...

た獨軍以上の悪条件を我方は備...

長の作戦計畫に基きマゾール...

のであつた、之に對し我軍は...

ならぬ、我軍は地形、交通路の要所を...

であるが、戰場外追撃によつて...

殊に

介石が露語した...

歐洲大戰に於ける最大の靈滅戰...

ベルグ戦に於ては露國のサムソ...

るまでの決戦をしないのであるが...

南方海州のわが作戦を包括する...

大會戰は露軍三十數萬に對してわ...

を要するに蔣介石の「國防線」...

○今次の日支戦事、實地も忘る可く...

ハ又州の地名も、橋が北京八里...

トモ入るは、金の大安二十九...

昌三年、誤工一、其の建、梁...

ポーロの化行も、世界無双であ...

ハ長サる、河、度、四、河、十...

ハ得る、規模、石、造、廿、四...

東の、秋、北、第、五、溝、渡、月...

翰の、碑、が、建、つ、て、あ、る...

グリツチと、ま、る、く、と、さ、く...

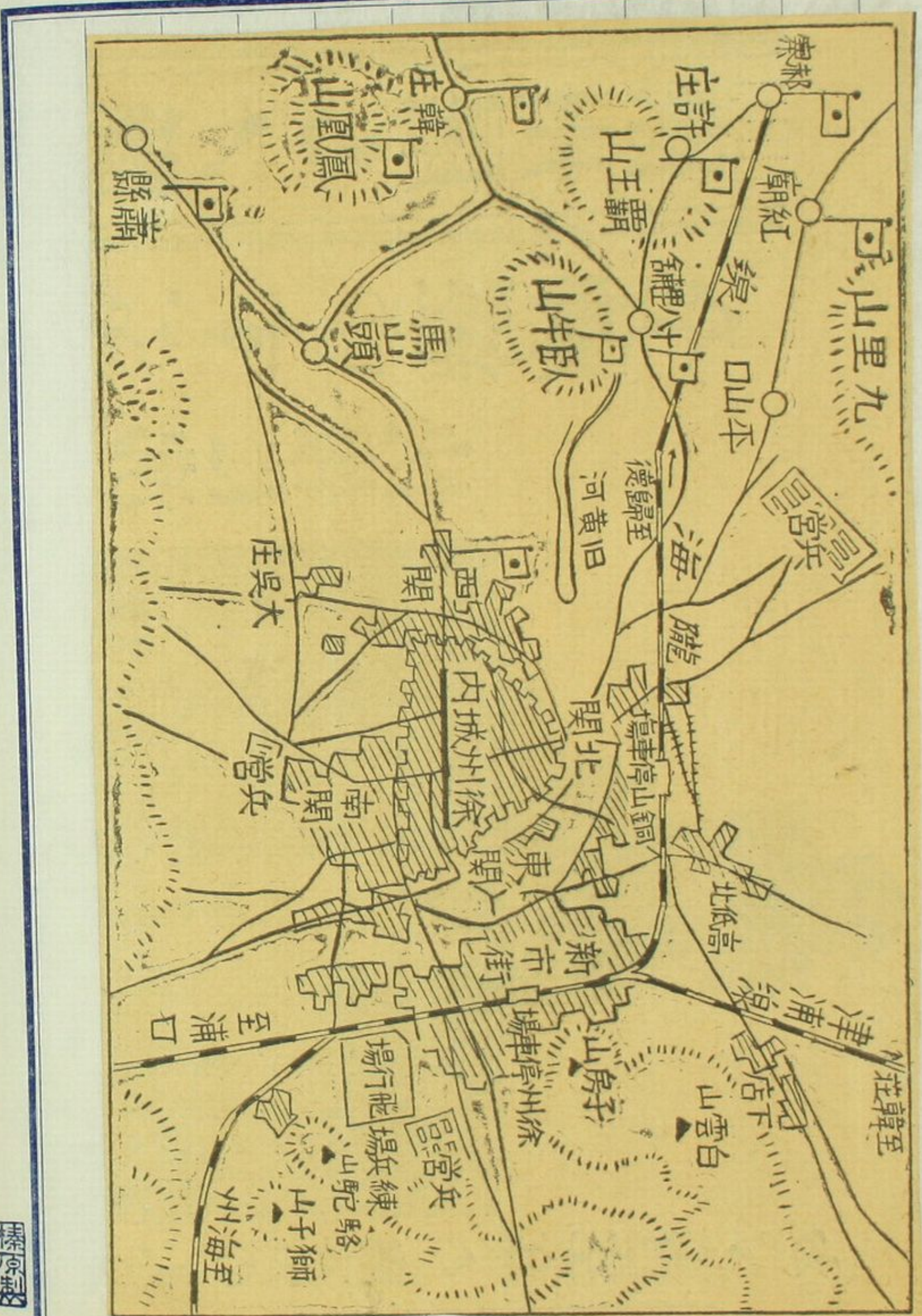
橋、の、北、側、と、あ、る、永、定、河...

是、河、は、昔、を、行、つ、た、時...

是、河、は、昔、を、行、つ、た、時...

大切を敵略にいざ包圍敵とすると、外廓に在る敵軍の包圍の皇軍と擁護することか出来らるるを以てみれば、若し外廓に在る敵軍を其依りし徐物を包圍せし皇軍の外廓内外の敵を挟つて却つて包圍せしむる切なきの事ある。皇軍の勇戦する。敵略の敵の三十萬の兵を黃河に引つけし對峙し、こゝの包圍の陣形を完敵する者ありあつた。皇軍の赤敵の軍をつき、清河を決行し、敵の衆を斬み、自ら其の勇戦する。テマに陶師し、皇軍の包圍の陣形を救ふ。北の巧術の戦術と其の效果の戦史に類例を見せし所あり。五月十日の戦史の奇異と是す。記す。二頁前、切板をぬめりて、大略が叙せられて、かく先着を要する。敵の退路を絶たれといふ、戦後の

展き、脱出の道なきを以て、勿論全軍を殲滅すること不可然し。適兵を擄揚すること、大仕事と相違する。志心しく大略を記して、今後の成りを見んとす。五月廿日朝録）本記に終つて十時、ケレンとあり、徐物の占領と公報あり。徐物の要害の地を此地と占め、天下に日長、すまを得たり。山に霸王の名を以て、此地を漢の先祖の起りたる也。此地に據るは、故より、今も漢浦、龍河、古城、道、後、文、又、蹟、此地の住すも、以て此地が、所、今、重、要、の、所、あり、と、知、る、べし。



開州城圖

〇或る多きはちんれ人数を敵死すの大敵に生獲りて虎
 豹毒蛇と名ひるる目も思ふも細首があるも微細
 たりとも油断はるる人内眼に糸し難い微細のよこ
 とむし老陰ひある。蟻が大夏も朽を倒し堤防を決
 壊するも細蟻の恐るることか推知し得る事し
 此頃ハナハ運河の州縣歴史を後人の此大事を業を
 完成するも亦大なる困難ハ何人があり此らこそん
 窮極蚊を滅ぶことあり此らも蚊の如き小虫が此の
 大事業の成否の関鏡を握つてゐることを人の謎の如
 くも思へるなり。古史の成るなりを人のハナハの如
 きに教世帯地なり。エロフハハルヤマラリヤか或人かそ
 んを人休し移すともハ即ち蚊とあることを知ると、蚊が

況やせん、大坂の始の蚊が悪疫の傳播者であることを知り、既にバナムに到つては、實際を詮合して、ゴシがス、握りして、かゝる蚊の撲滅を行はん、善疫の除くこと共に、マラリヤの征服せん、バナムは世界を稀にする健康地と云ひ、まゝに淨化し、女の大業の進歩にあらんことを、バナム運河の歴史、その偉功あることを、忘る可からざる人のゴシがスであらん。

開鑿をすべし、長年の事、振奮して為る工事を、公一君の中絶に、例のゴシがス、丹那トニ子んを、この意のえ出あが、或る日、半途に工を休めんとする、危機に瀕したる幸、新念し、このうれの、成ゆれば、志の、長年の、長い年月と、要した。余が、郷國の信

川を今あす、大河津の開鑿、は、幕府時代、は、試み、よ、れ、時、ある、地、懸、り、ゆる、敷、き、つ、る、日、方、逆、戻、り、し、て、お、この、北、浦、を、バケ、と、よ、う、す、所、と、よ、め、て、遂、に、中、絶、し、た、か、實、に、地、す、む、か、の、為、り、を、あ、つ、た、こ、と、か、今、ハ、ワ、カ、リ、北、政、務、七、の、況、を、さ、ら、し、て、遂、に、成、ゆ、し、た、此、等、開、鑿、を、す、べ、し、女、の、親、撲、バ、ナ、マ、と、曰、ふ、は、誤、す、べ、き、じ、う、の、か、高、津、鑿、成、切、ま、は、し、志、の、甚、心、の、歴、史、が、あ、る、こ、と、を、思、ひ、な、げ、ん、ら、ん、ぬ。

の支那人が、ゆゑ、南子に拘泥する、ふ、つ、き、北、次、物、語、が、あ、る、支、那、人、と、捕、へ、探、偵、が、あ、る、か、疑、も、あ、る、を、衣、類、も、ま、つ、て、取、調、べ、て、見、ると、履、草、が、い、は、ぬ、ら、札、換、の、よ、も、を、大、切、う、し、と、あ、る、の、か、も、れ、が、日、本、人、に、見、換、ん、ぬ、こ、の、よ、も、


飛城晚城恰乘隙欲守何地難其遠道恨道
 擊時差遲遲還雷轟中送双石南京空軍
 太平武定諸城夕野田冢本各部隊鬼氣漲天
 戾山堆腥風匝地血河漲十二月十日
 何幸美未劫日火累結數城外寒山寺詩靈柩
 伴張懿孫烏啼月夜人所記張佳日字八懿孫也
 追擊二十六時間不曾退轉城墜下決死復約一
 先登任地敵彈如雨溜柳部部隊先登
 械銃陣營何家所潛行匍匐目能定影情全
 中彈氣仍凜教令全終令亦終徐家江川上少
 壽三〇十一月八日
 渡河先鋒言太急彈盡糧乏橋未流挺身聯

南京

瞬


倭四勇士名姓真是傳千秋田上柳部蘇柳河
 攀險越絕峻任幾月德餘意氣仍懋壯敢
 如今戰後君休問部下將兵多白骨夢昭板板
 無齒猫力窮餘鼠不知活路何處求去竟血染
 五重雪滿山燦作紅葉秋
 敵戈奮碎滾技部殲命吳淞危彈氣生年廿九
 誰可哀戰功刻後稀今古友田恭助任長
 宛然天半鵬亂舞投彈炸裂光燿之涿鹿原歌
 保定城機間化為火燭海保定城機手
 聲的在我日星炳證如彼要深省堪驚忘新
 龍片言吐之傳正典統欽
 敵有追擊銳機團、擊滾圍繞敵憑恃科子力輸

和蘭船の字くからとゆへ来て居る高を許さんしめぬ。前もその
ことく海軍の練習もあまた蛇の手に初めえ、祝元丸の
寄附と云ふは、日本甲艦の米を運ぶを頼さんせしめ
程遠い関係かあつて、高は監視し、その自在に
出歩るしくし出来うらたか、米英仲の條約が従
ふもつて、不平等も初めし自由の出歩ることか出来
やうなきうたのひあつた。

ハリ人が幕府と條約の法則とをわす下田と薩長を根
とあると、領所への龍の旗を掲ぐことを制し、
とすふと要求するも、ハリ人は、をえをせき入んが、
漢和に二時河を委やしれと云ふこと、初年だが、ハリ人
は米英の代理人であつた、斯う要求、無礼と云ふ



此の如くしい。北送流の、初年か。

勝の艦長の身命かあつて、舟に納い、しが有るが、或人と航
海中起るお比例の、船中も、地を不評判のあつた
かつた。あつた人の、痲痺持び、情怒を漏らすことか、
くいあつた、木村茂舟の、あつた、あつた、
ことか、不平かあつた、しいか、あつた、
め、ことか、出来、あつた、しいか、あつた、
逃、ことか、あつた、しいか、あつた、
祝元丸、二十、あつた、あつた、
と、あつた、あつた、あつた、
と、あつた、あつた、あつた、
の、あつた、あつた、あつた、

ハ此の海賊が其海軍の始祖である。この海賊が其海軍
として海軍が出来たことある証言がある。古の歴史は海
の三弊征伐を海を論じての戦多うある。海賊が卷
加して瀬戸内海をいふるを海賊のまかりし所也。彼等
附近の豪族と結び合ひて利用し合つた。是等
海賊より海軍の如くまじく親分がある。彼等七ある
此例への細川氏と大内氏、東西の大親分が其時、
若くは家の之の属してゐた。彼等や其時が天子を
一統するに、此方の親分の海賊を以て略奪を事
とししが、徳川の時代となりて、彼等より高きとくぬ
がきぬ、このまじく主と物に其の運送するを司とせ
つた。此の海賊の内、鹽飽守氏とまじく、侍舟の

下津井よぶると、徳政丸を取出し海軍との間に
罹列す。一郡の海賊が大小二十六時と及ぶが、此時出
の農作の位もまじく、か出来ぬの、海を家とせし、國
縁から香取を海士の働きを、成信丸が太平
洋を無難に航し、海士の、此の徳政の、小夫が、此の
云はてある。

○支那の昔から倭寇の回、外回を幾度する、其の
の伝統的習俗であつた。世界は、表の徳政の、まじく
の外回を、表狭として、戦術した。外回を、交際を求
め、其の、まじく、海軍の、略り、まじく、朝貢
と見做した。まじく、天子、海軍の、時、思ふ、跪叩の、礼
を、日強、此、支那の、長い、外交、まじく、此の、儀、礼、古、の、歴

史よりその心きよむ。露國の如きも英國の如きもさく、此の儀
礼を強くせん。又左序に坊くが折角やうと未だ使節
が此儀礼を肯んにさるる。空しく帰つたよる。頻々と
あつた。如しやの使節の思ひつきり。●露使が支那の天
子に即ち跪叩の礼をうやうと同一く露白王の言まの
前、支那の相市の官吏が跪叩の礼を取らへしと交
換的、跪叩をやることよりお茶を濁しれことあり
り。英國の使節がこんど勅つたこと。もあつた。多くの場合
此の儀礼の爲め外回使節の怒つて去つたが例の交換的
儀礼をやつと支那の主権者も認めしよ。外回使節の要求も
二蹴すものも常からつた。外回使節の例として英使の送
物を齎す。大官の袖の下を踏つたけいも、是等儀

禮記

四の貢物と見做して取り敢へてあつた。互市の如きは
が支那のやうなきて皆支給せられた。当時滴在中の
ンは笑つて置つた。英王の如きも兩本位の回、跪叩位
を免や角場あつた。めまらんとあつた。●
本位の英國の儀礼が難校き難儀の儀
壁にあつた。例の所件事件の英國の禮節の斷
を支那のまじり、こゝに支那の門戸が用け、香港が英
動議し注外回七英に倣つた支那の初めも屈しれが志が
く懐か思想の依然として滞在してあつた。心あつた。●
●懐か思想が獲れあつた。とあつた。一例の英王の借款
と鐵道も敷設しれに、回民がやうきして支那政府の
鎮撫が出来らうた。●北城の借款を拂ひ戻せん全

十畝會水郷遊覽日程

(晴雨に不拘)

十一日(土) 午後 一、〇〇

兩國驛二等待合室集合

午後 一、二三 (銚子行)兩國驛發

午後 四、〇九 銚子驛着(自動車)

曉鷄館 泊

磯めぐり

十二日(日) 午前 九、二〇 旅館出發(自動車)

午前 九、三〇 銚子遊覽船發着所發

(貸切遊覽船)

午前 一、三〇 息栖神社前通過

船中にて晝食

午後 〇、三〇 大船津着

龍島神宮參詣(バス五分十丁)

午後 二、〇〇 大船津發

午後 三、〇〇頃 潮來通過

途中十二橋、與田浦通過

午後 四、〇〇 佐原着

香取神宮參詣(バス十分十五丁)

午後 五、〇〇 佐原着

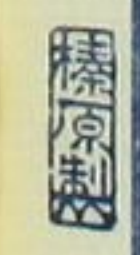
金田旅館夕食(驛前通り)

午後 七、三四 佐原發

午後 九、四一 兩國着 解散

日も別天地のありの思とさうした。ゆゑに今の世の中心と斯く
神仙的の幽郷がある。その思を嘗て不圖著し思ひ
めし。

鹿嶋神宮の武甕槌神と祀り、北神と奉りたる神
社の領域のふちを四角の多きと敷ふ、他の東
北方注釈より多き神威の山漸を述べたものがある。案
ずらん鹿嶋神宮の創祀は神武天皇の即位元年即
紀元元年七二千五百九十七年前、此の神宮の祭神
武甕槌神が神武天皇の東征を援助せられたる神
武天皇の勅と由り、原島香取の神と祀えられたる。
實は武甕槌神の神武天皇御創祀前既に此地に
鎮りし所の也。北神の出雲國を中心として今の



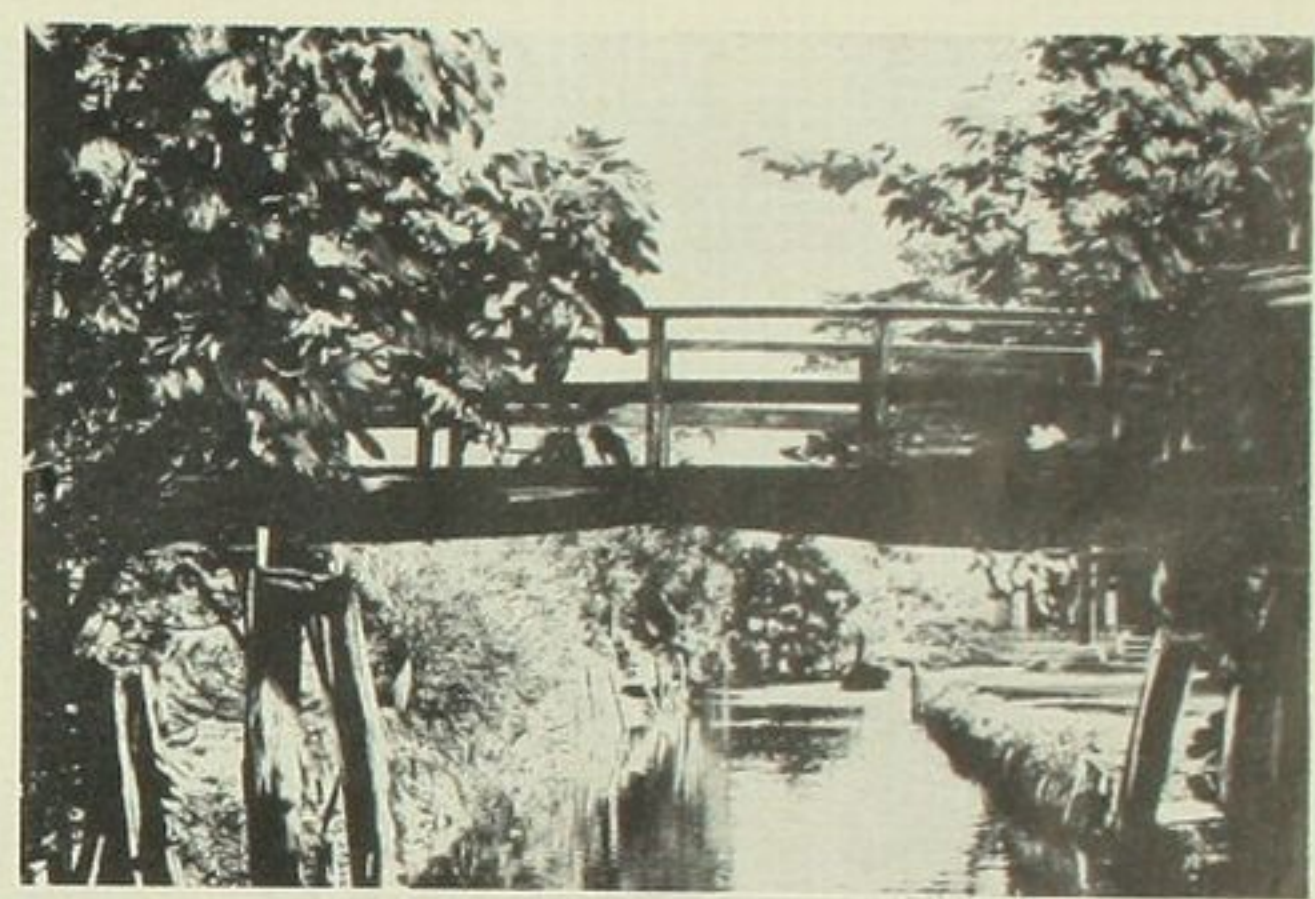
山陰山陽のあまの勢力を有する出雲民族を以て
遠く山陰東へ至る此の鹿嶋へ来り、当時東北に諸族
との交渉の一端を担つてゐた。当時舟の舟と唯一の
交通機関として神代より鹿嶋へ文も又聖徳の實は
先かある大和民族より先き先任の民族のあつ
たことか多数の石室や貝塚の遺跡より由りて証明せん
が鹿嶋神宮を中心として、東西南北に相並んぬ圓状を描き
六七町の距離を隔てる数々の古墳の存在する。鹿嶋
の鹿嶋神宮を中心とする民族生活の遺跡を以
て、この神武天皇の武甕槌神と創祀せん
たのり、その神武天皇の命の在世の時と云ふ。斯くの北神
は日本帝國建國史上最も切實なるものとして、神武民族

Blank lined page for writing.

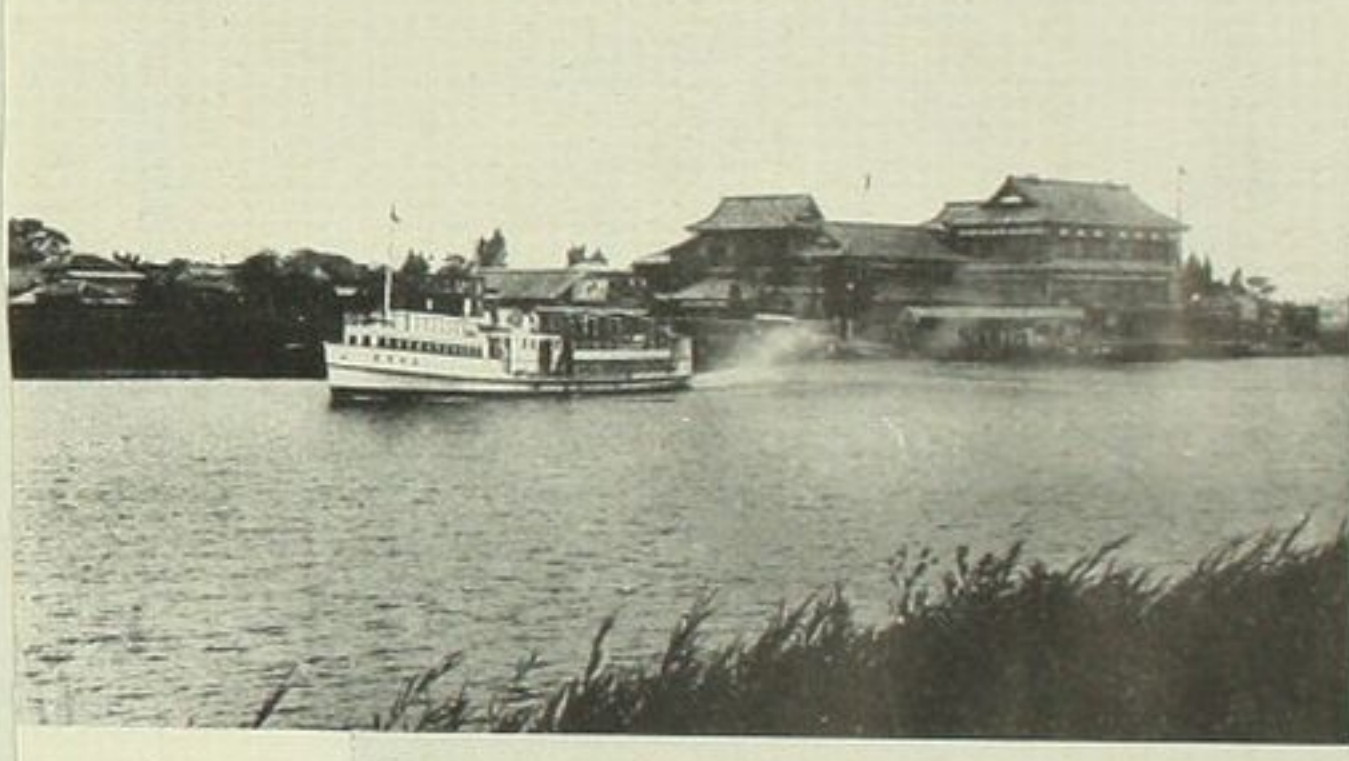
茅と葦の天保十二年、梅代村の本を植ひたる由り。

水郷の歴史

水郷の十二橋



潮来渡止場



水郷あやめをどり



◇ 君が濱(一名篠ヶ濱)犬吠岬に隣接せる長汀一帯の名

である奔瀆が岩石に富つて飛沫が砂濱を隔てた松林に

も一面に霧の降る様は此處丈は又格別の風情である。

◇ 海鹿島は海上五丁の處にありて明治三十五年頃迄は海

鹿多数群集し犬の子の狂ひ遊ぶが如く其岸白鳥の鳴く

に似て遠く聞いたり。

◇ 黒生浦、戊辰の役に榎本武揚等幕末の將士軍艦數隻を率いて品川灘を駈奔し函館五稜廓

に立ち籠るべく途に難風に遭ひ坐礁したる美加保燈

の碑が奇石高岩の傍らにあります。

◇ 無線電信は夫婦ヶ鼻にあり、明治四十一年五月の開

設にして我國創始のものであります。本縣一等測候

所も此處にありて明治十九年九月の創立であります

◇ 千人塚は往年鹿島灘大暴風の時遭難したる漁夫の死

屋千餘を埋葬したる記念の塚であります。

◇ 川口明神は漁業者の崇敬する大漁の神様であります

此處よりの眺望は又一段であります。

◇ 銚子観音は飯沼觀音とも云ふ。今より千餘年前海中よ

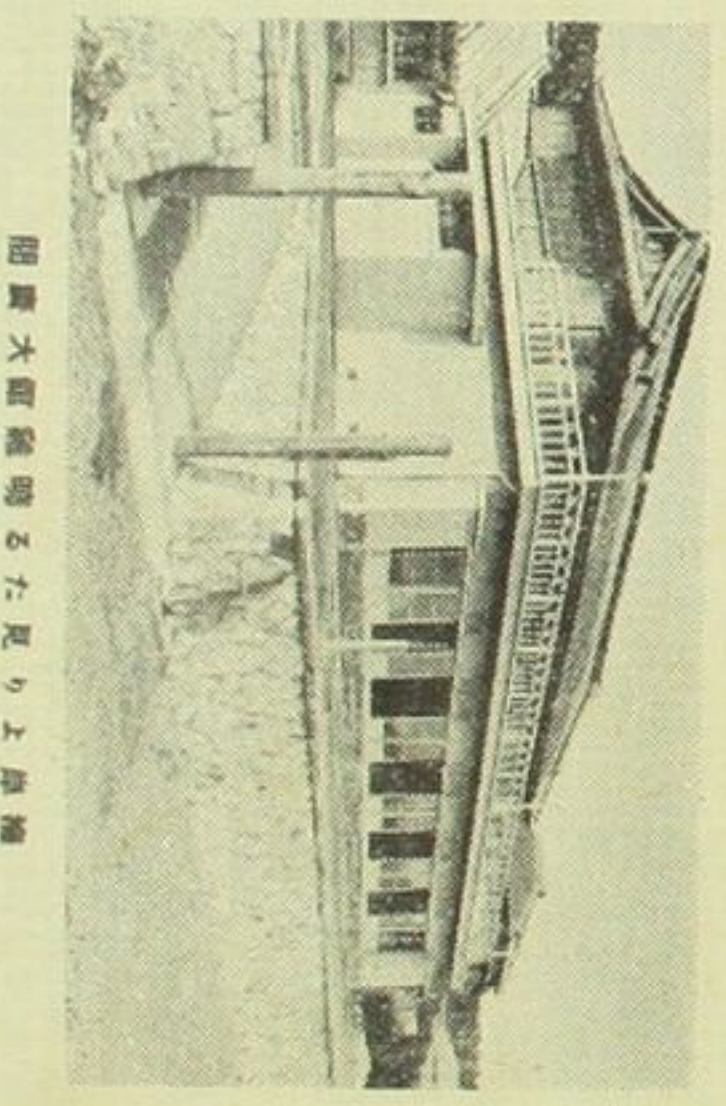
り出現したる十一面觀世音で阪東二十七番の靈場で

其名も高し。

◇ 宿泊料二圓五十錢以上 中食料一圓以上 團體は特に勉強致します。

▽ 弊館藥湯(かじめ湯)は胃腸病、健腦質斯、神經痛、其他一般冷性に特效あり。

御宿泊料



函館大館館長崎のた夏りよ島柳

交通

兩國驛より銚子驛まで一圓七十五錢 所要時間三時間以内

銚子驛より犬吠驛まで電車賃十六錢 十八分

兩國驛より成田經由銚子まで一圓九十二錢 三時間半以内

上野驛より成田經由銚子まで一圓九十三錢 三時間四十分内外

佐松線香取驛より銚子まで五十五錢 一時間

銚子驛より弊館まで乗合自動車にて二十錢 三十分

銚子驛より弊館まで貸切自動車一臺二圓 二十分

鹿島神宮参拜は銚子對岸波崎町より乗合自動車ありて一人一圓十五錢所要時間二時間なり

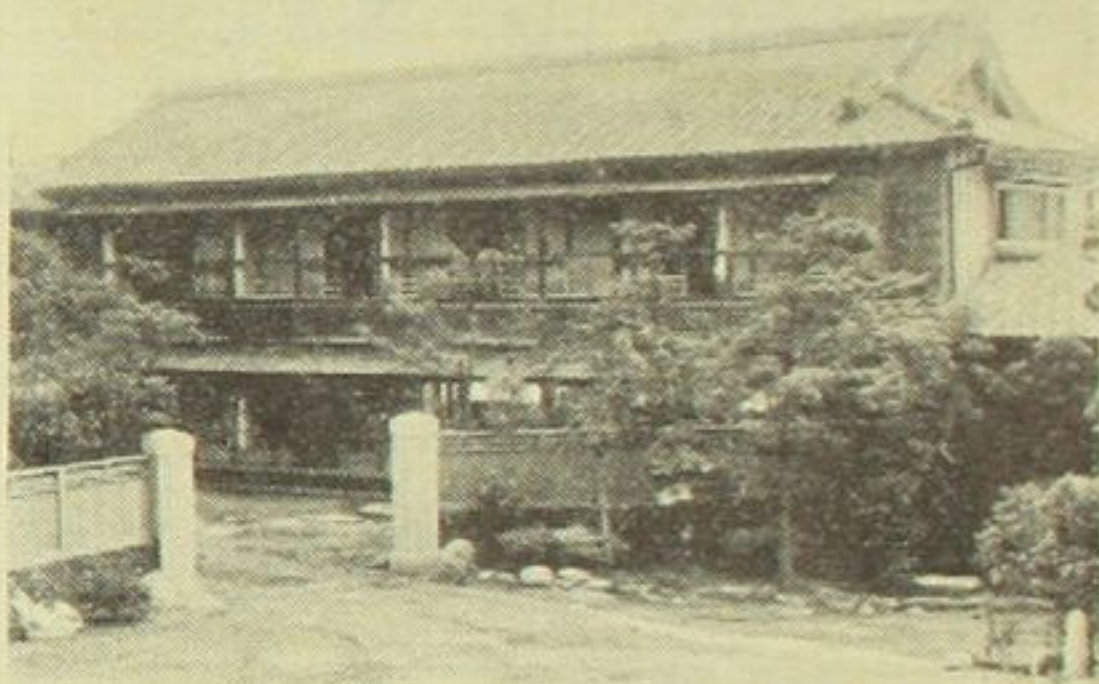


岬六十七番

御料理 藥湯 曉 雞 館

電話 銚子(三二八七番)

銚子曉雞館と其の環境



明雞館前庭廣外景

◆ 弊館は本館、別館、東離れ、松涼亭、大小六十有餘の客室がありまして西北に丘陵を負ひ東南は海に面し夏は涼しく冬は暖かにして眞に避暑避寒の最好適地であります。

◆ 園地には百疊敷舞臺付大廣間の設備もあります風景は渺茫たる太平洋の怒濤け岩を噛み飛沫は水晶の球を散すが如く眞に男性的氣分を發揮し實に其雄大さを想はしむ。

◆ 懸崖しの岩は弊館廣間庭園にありて、大正六年廣間建築に際し山林を崩墜せしに露出したるものにして、臺は高さ一尺五寸位の茶臺様のものなれば、故伏見宮貞愛親王殿下に献納したり學者の説に依れば今より七百年前アイヌ人の生息したる時埋め置きたるものなりと云ふ。

名 所

- ◇ 弘法水は長崎浦の岩間より湧出せる清水を弘法水と云ふ村人皆之を飲料とす浦の突端にあるを雀岩と言います
- ◇ 屏風岩は長崎浦にありて隔年芝崎八幡宮外二社の御幸には神輿が此の岩に御休みになるのが例である。
- ◇ 仙ヶ窟は犬若浦にありて(一名千騎ヶ浦)と云ふ昔源義經が奥州へ落ちのびる時難風に遇ひ千騎の兵士を此岩窟に隠したるより起れると云ふ。
- ◇ 犬岩は犬若浦にありて鬼神の弄技になれる巨大なる犬の形をなせる眞に大奇岩である。
- ◇ 犬若浦、犬岩の西方一帯は此海岸唯一の安全なる大游泳場で婦人も子供も安心して遊びが出来る此浦に限り渚に鐵砂が寄せて居ります。



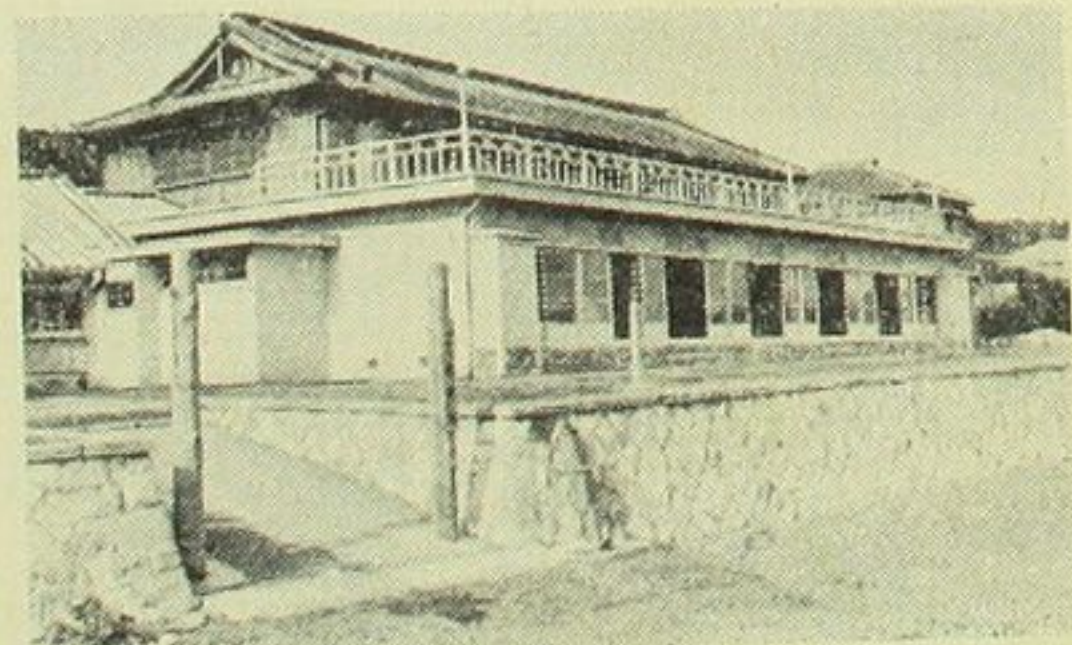
明雞館庭園上より犬吠岬燈臺を望む



明雞館前庭廣外景

- ◇ 屏風浦は名洗灣より飯岡浦に至る海岸一帯にして其景色又日本内地には珍らし。
- ◇ 高神展望臺は海拔七十四米にして下總第一の丘陵なり其眺望は又一段にして他に見る能はず然れば縣立公園の指定地であります。
- ◇ 犬吠燈臺は明治七年十一月十五日初めて點火した英國人ジユムスグリーン氏に依て建設したる圓形白色煉瓦造りにして、高さ九丈海面を抜くこと十六丈八尺燭光は九十萬燭と云ふ白色施轉でありまして海上十九里を輝すと云ふ。又警霧機を設け濃霧の際警笛にて十六海里沖に信號す。
- ◇ 君が濱(一名霧ヶ濱)犬吠岬に隣接せる長汀一帯の名である奔濤が岩石に當つて飛沫が砂濱を隔てた松林にも一面に霧の降る様は此處丈は又格別の風情である。
- ◇ 海鹿島は海上五丁の處にありて明治三十五年頃迄は海鹿多數群集し犬の子の狂ひ遊ぶが如く其聲白鳥の鳴くに似て遠く聞いたり。

- ◇ 黒生浦、戊辰の役に榎本武揚等幕末の將士軍艦數隻を率いて品川灣を脱奔し函館五陵廓に立ち籠るべく途に難風に遭ひ坐礁したる美加保艦の碑が奇石高岩の傍らにあります。
- ◇ 無線電信は夫婦ヶ鼻にあり、明治四十一年五月の開設にして我國創始のものであります。本縣一等測候所も此處にありて明治十九年九月の創立であります
- ◇ 千人塚は往年鹿島灘大暴風の時遭難したる漁夫の死屍千餘を埋葬したる記念の塚であります。
- ◇ 川口明神は漁業者の崇敬する大漁の神様であります此處よりの眺望は又一段であります。
- ◇ 銚子観音は飯沼観音とも云ふ。今より千餘前海中より出現したる十一面觀世音で阪東二十七番の靈場で其名も高し。



明雞館庭園上より見たる明雞館

御 宿 泊 料

▽ 宿泊料二圓五十錢以上 中食料一圓以上 團體は特に勉強致します。

▽ 弊館藥湯(かじめ湯)は胃腸病、痲瘋質斯、神經痛、其他一般冷性に特效あり。

交 通

兩國驛より銚子驛まで一圓七十五錢 所要時間三時間以内

銚子驛より犬吠驛まで電車賃十六錢 十八分

兩國驛より成田經由銚子まで一圓九十二錢 三時間半以内

上野驛より成田經由銚子まで一圓九十三錢 三時間四十分内外

佐松線香取驛より銚子まで五十五錢 一時間

銚子驛より弊館上まで乗合自動車にて二十錢 三十分

銚子驛より弊館まで貸切自動車一臺一圓 二十分

鹿島神宮參拜は銚子對岸波崎町より乗合自動車ありて一人一圓十五錢所要時間二時間なり

銚子犬吠岬

御料理 藥湯

曉

雞

館

電話銚子(三六番) 一八七番

此へちまをておまののまに愛想かつされ
口福吟申子三花物山陽の自畫山あの上の題をあると
つん心まえり左の朱書の外ふあつた他の墨書の二の
と向しあつて二の詩おまぬのあつた朱書刻本
に無し也々々初書をまへて又の二面は題をあると
返す

二月十日

古賀貞清卿為其藩侯釣島史索
吾畫寄以絹一幅書此辭之

賴 襄

未定稿の作

收拾雲煙寄戲嬉峰巒滿幅墨淋
滴。值嫌點染。欠妍麗。免被人呼做
畫師。

磊砢橫胸不自持。吐為狂墨漫淋
漓。此心應有故人識。敢向侯門喚
畫師。

曾謝橫經弄翰儒。寧將餘技待觀
娛。懷中畫本猶堪獻。彷彿遊風七
月圖。

香取浦

十六日

大の海、西に利根川に、つゝき東に銚子に
 到ること十里餘、北の方ハ潮来と云
 り一里餘、乾ハ霞の浦に、つゝき、
 十里餘、つゝき、麻崎息柵と云ふ
 香取の海中、自今、沙出来、天正十八
 年、寛永十五年、あつた、まが、十
 六日、斑田の切成、之人と、新治と
 云ふ
 以上十六日、沙の内、加藤沙、二十二橋を
 架す、川の右側、民家あり、北の
 橋も、通りの、まが、也



潮来

鹿島より西二里行方郡、あり、塩井
 あり、あまの地、つゝき、と、板来と、考き
 多と、おの、西山、公、常、陸の、方、言、ん
 潮を、い、れ、と、云、ふ、つ、と、潮来と、改、め、と
 つ、と、い、は、た、及、の、存、存、三、つ、と、き、と、い、は、
 と、云、ふ、西の、入口、潮浪、里、と、呼、ぶ、板、来、
 リ、と、云、ふ、と、い、は、た、の、所、ま、む、十、何、餘、其、間
 を、淺、河、下、と、云、ふ、北、河、と、海、平、山、と、
 勝、禪、寺、あり、右、大、好、の、是、三、ん、か、
 也、

詩佛の記云く

随印

思似月の後、あ、行、家、遊、即、行、試

從十二橋發神皇河何橋無月の

潮未おし

いにし出しまの十二の橋を行きつと

しつ志をん橋

悉のちこふを流れいかに申し移りて

とらふま猫ちや

柳よやまきよまきる尾なきいばふ

風もる心かんせ

浪逆の海

大船津の前なる海をさふ此の海防
潮の精波さかの初なる此老翁

大船津

八廣路神社の古なる変らう海中
よ華表ま立ちあふ



鹿島大神宮

正殿に武甕槌神と祀り相殿の神
ハ右経津主命、左、天兒屋根命也

祀、神代の昔より鎮座

佐原

ハ不利根才一處あり地々此町の甲
夫れ川左のりも橋を架ち、此佐原の

ハ口郡折幡より新市橋をこき

物ゆきしるハ大崎迄より出物ゆ

ニ至つて一糸より大橋をこき利根

又入る未發治貨轉渡の地

正殿経津主大神、神代より鎮座

一のき右あや中不建と云此の神宮津

の宮とも云ふ、津入りの船社家、風を

香取神宮

待つ不津と云ふ。鹿島七七とい津の宮と
云ふしこと風土記に見ゆ。津の鎮座の
宮より故に此名あり。至徳三年鎮の
洪鐘あり

利根川上

大別して上中下の三利根川と云ふ
其上利根川に入るもの、赤谷川、若
知川、白根川、片利川、赤谷川、島
川、志保川、波良瀬川等あり。此
間約二十八里

中

このふかんと二川と云ふ、其北より赤
堀川、関谷川等あり。再いふ、一川
川と云ふ、平時は南に江戸川に入る



大島の時の一利根川の本流をより、東
之より、流も絹川、養老川と兼す。こゝを
中利根川と云ふ。凡十六里ぬ、其の南を
こゝ権現寺川、関谷川とあり。逆川を
突る南に江戸川と云ふ。堀江と云ふ
海に入る

下

利根川は益大と云ふ。南へ下流ゆり、手
賀川、印幡川、長沢川等を并せ、北の
赤谷の大浦、波良瀬浦を突る
度、こゝ八里七十間許、大江と云ふ
凡二十里許を經、鉾子口を過り、入
りこゝを下利根川と云ふ

改東太郎

改東の番蛙や太郎河 水村

鉦子

久之や激を研流す刀福の音 鉦子
下流四上郡より大日香東方

海嶽

の限り大坊崎と云ふ 胎内より

アシカ崎 石切の鼻 松岸

キリが濱 川口 和田不動 犬若崎

千崎岩 黒石(カン石と云ふ)

南郷

長江三万里、短棹一航無
舟上迷冥雨、舟前
遊急流、首巖投泊法、雲霧間津橋、登

標原製

岸如何交、茶名に惹旅愁

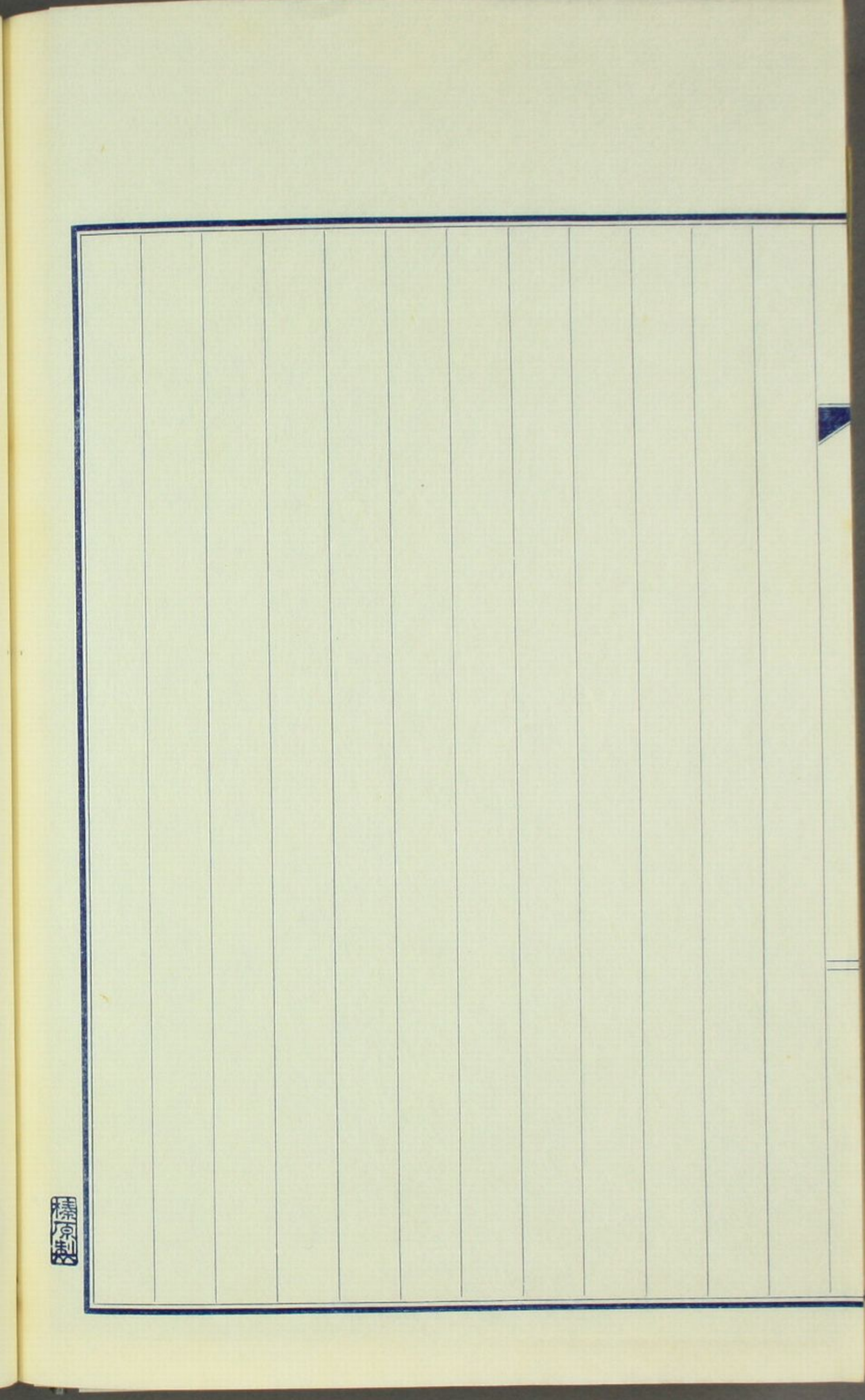
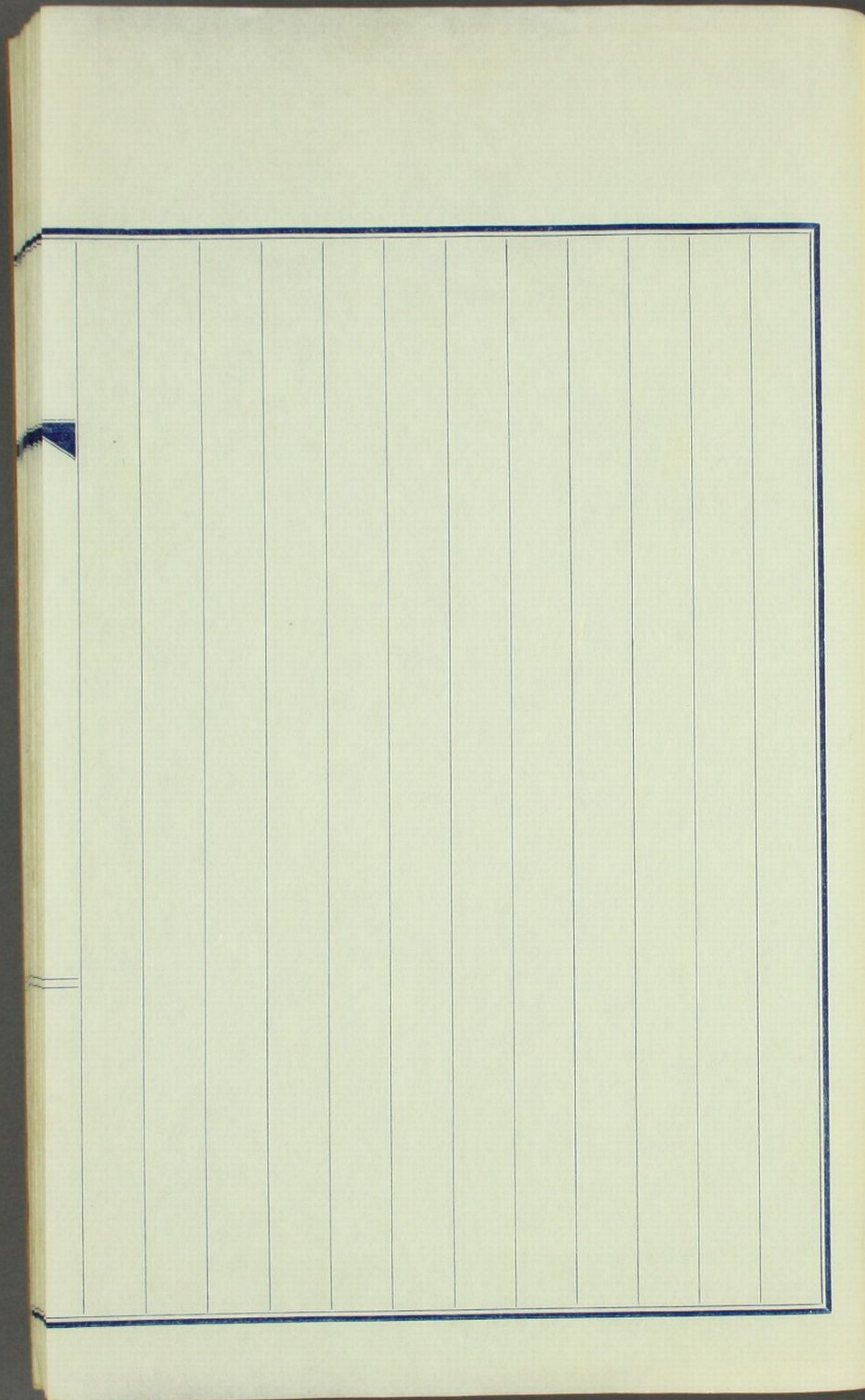
(利根川国志抄)

九十九里と白里と云ふ一里居と云ふ也

余のち年時初めに出京の時、関方より板舟に接し
翌朝日るも宿をこぼし、利根川の回をてを思ひ
起す

印懐深久しく受けも別り見しことあり、此の潮騒
ハ志はく企てん、余の親戚能く之を聞かば
もまてしことあり、一たび訪んと思くもるる来り

成の秋晴寺、将門遺址、作人、樽取、魚彦



標原製

東蒲原日土谷公園碑

校口五客、撰文
字數頗多、
余の書也

長井雲作畫伯之碑 新白山公園

長田秋濤也居士紀念碑

飯後新井御酒石碑 撰文也

小野東洋先生銅像台石 刻字 大隈令館の
庭園に在り

昆田文次中ノ夫島墓 撰文
古法林真字

此等の外に金石文字ありんども、他日下存するは拙書

に依河の小木、江島山人の日向碑の傳りて、小屋を楮

ひ江葉亭の扁額、飯後亦原字天朝山宗家の曰

址、扁額と押書あり、撰志園記、星の橋士撰文を

石に刻し、心も果てり、故、予扁額、新九亭内

と掲げあり、庭内の撰志園記、又碑あり、内島種山の
撰文あり、往年、此碑を建てるに、余の共ありたり。

謹啓 梅雨の候愈御健勝の段奉賀候
陳者豫て起工せる新井郷川治水碑建設工事今般竣功致候に付ては左記に依
り是か除幕式舉行致候間御多用中乍御迷惑御繰合せの上御参列の榮を賜り
度此段御案内申上候
不備

記

一、日 時 六月十九日午前十時
一、式 場 濁川村大字名目所字三軒屋

昭和十三年六月九日

新井郷川水害豫防組合管理者

地方事務官 常松彌重

市島謙吉 殿

追白 右除幕式終了後松ヶ崎濱村松濱館に於て粗宴開催致度存候に付ては乍御手数御参列の有
無を來る十五日迄に御回報相賜り度尙御参列の際は本状を受付係へ御示し被下度候



○最近の「浮燈」の流の「時」の「ゲ」の「意」を「商」が
谷川徹三の「回」の「載」を「ん」の「み」の「血」の「め」の「ん」の「人」の「ま」の「進
ん」の「あ」の「こ」の「と」の「れ」の「か」の「日」の「本」の「む」の「い」の「思」の「い」の「備」の「池」の「ま」の「り」の「こ」の「と」の「更」の「省」の
て「あ」の「ま」の「ん」の「が」の「考」の「え」の「ま」の「あ」の「め」の「代」の「何」の「人」の「備」の「も」の「乾」の「燻」の「無」の「味
て「あ」の「ま」の「ん」の「が」の「却」の「り」の「七」の「書」の「生」の「め」の「代」の「い」の「病」の「居」の「娘」の「と」の「佐」の「托」の「い」
の「か」の「終」の「こ」の「ま」の「と」の「ま」の「つ」の「あ」の「る」の「も」の「も」の「少」の「る」の「ま」の「い」。今「い」の「ま」の「春
時」の「代」の「意」の「相」の「洗」の「い」の「其」の「人」の「備」の「池」の「中」の「の」の「大」の「事」の「件」の「が」の「あ」の「つ」
池「公」の「死」の「活」の「載」の「も」の「や」の「つ」の「あ」の「る」の「れ」の「か」の「ら」。今「ん」の「思」の「い」の「も
お」の「か」の「し」の「る」の「こ」の「と」の「れ」の「こ」の「ん」の「を」の「ブ」の「ラ」の「ン」の「ク」の「に」の「持」の「殺」の「す」の「る」の「ら」の「不」の「意」の「義
ま」の「し」の「い」の「も」の「ま」の「り」の「得」の「る」の「ま」の「あ」の「ら」の「う」。が「何」の「テ」の「の」の「ぬ」の「き」の「熱」の「地」の
人」の「愛」の「人」の「ま」の「ま」の「ん」の「が」の「あ」の「つ」の「れ」の「い」の「あ」の「れ」の「事」と「云」の「い」の「あ」
る。

ライブチヒの大學生としてゲーテが毎日午餐をしたために行つてゐた店の娘、ケートヘン・シューンコップをめぐめるもので、ゲーテは自らケートヘンの戀人をもつて認じてゐたが、ケートヘンの方ではそれ程にも思つてゐなかつたらしく、ゲーテが熱で寢込んだのを知つてか知らずにか、ゲーテの競争相手であるリーデンと芝居を見に行つてしまふ。それを憤慨して友人に訴へた手紙である。

「……彼女がその晩中と月曜日中とにつづけてゐたこの素振りは、僕に非常な苦悶を惹き起したので、僕は月曜日の晩に發熱し、昨晩は悪感と熱とにひどく苦しめられ、今日中家にゐなければならぬとされた。——さて、ペーリツシュ、僕が冷靜に話すことを望んでくれるな。神よ。

何か買つて来て貰はうと思つて、今日の夕方使を出した女中が歸つて来て、あの方はお母さまと芝居を見に行つてらつしやると知らせてくれた。丁度その時、發熱が悪感をもつて僕を苦しめてゐたのだつた。この知らせを聞くと、全身の血は火となつた！あゝ！芝居を見に行つてゐる！戀人たる僕が病氣であるのを知つてゐる時に、神よ。餘りひどい。だが、僕は彼女を許した。僕は何の芝居をやつてゐるのか知らなかつた。何だつて？彼女はある人達と

芝居を見に行つてゐるのだつて？あの人達と！それは僕を震撼した！確めねばならない。——僕は着物をきて、氣狂ひのやうに駆けつけた。一番安い切符を買つて、最上階に行つた。ああ！新しい一撃だ。僕の眼は悪いので、棧敷までは見えない。氣が狂ひさうに思つて、眼鏡をとり家に走らうとした。僕の側に立つてゐた質素な身なりの人が、僕の混乱を救つてくれた。その人が眼鏡を二つ持つてゐるのを見たので、一つ貸して下さいと丁寧に頼んだ。彼は貸してくれた。僕は見下して、彼女の棧敷を見つけた。

——ああ！ペーリツシュ！
僕は彼女の棧敷を見つけた。彼女は隅に腰かけてゐた。彼女の側には、誰だか分らない少女が居て、次にはペーテル、その次には母親が居た。——だが！彼女の席の後はリーデン君が居るのだ。ひどく物やさしい態度だ。ああ！僕の心を考へてくれ！僕の心を考へてくれ！ガレリーでオペラグラスを持つてそれを見てゐる！畜生！お、ペーリツシュ、僕は激昂のために頭が破裂しやしないかと思つた。芝居は「ミス・サラ」をやつてゐた。シユルツエがミス・サラを演じてゐた。が僕は何を見ることも、何を聞くこともできなかつた。僕の眼は棧敷にあつた。

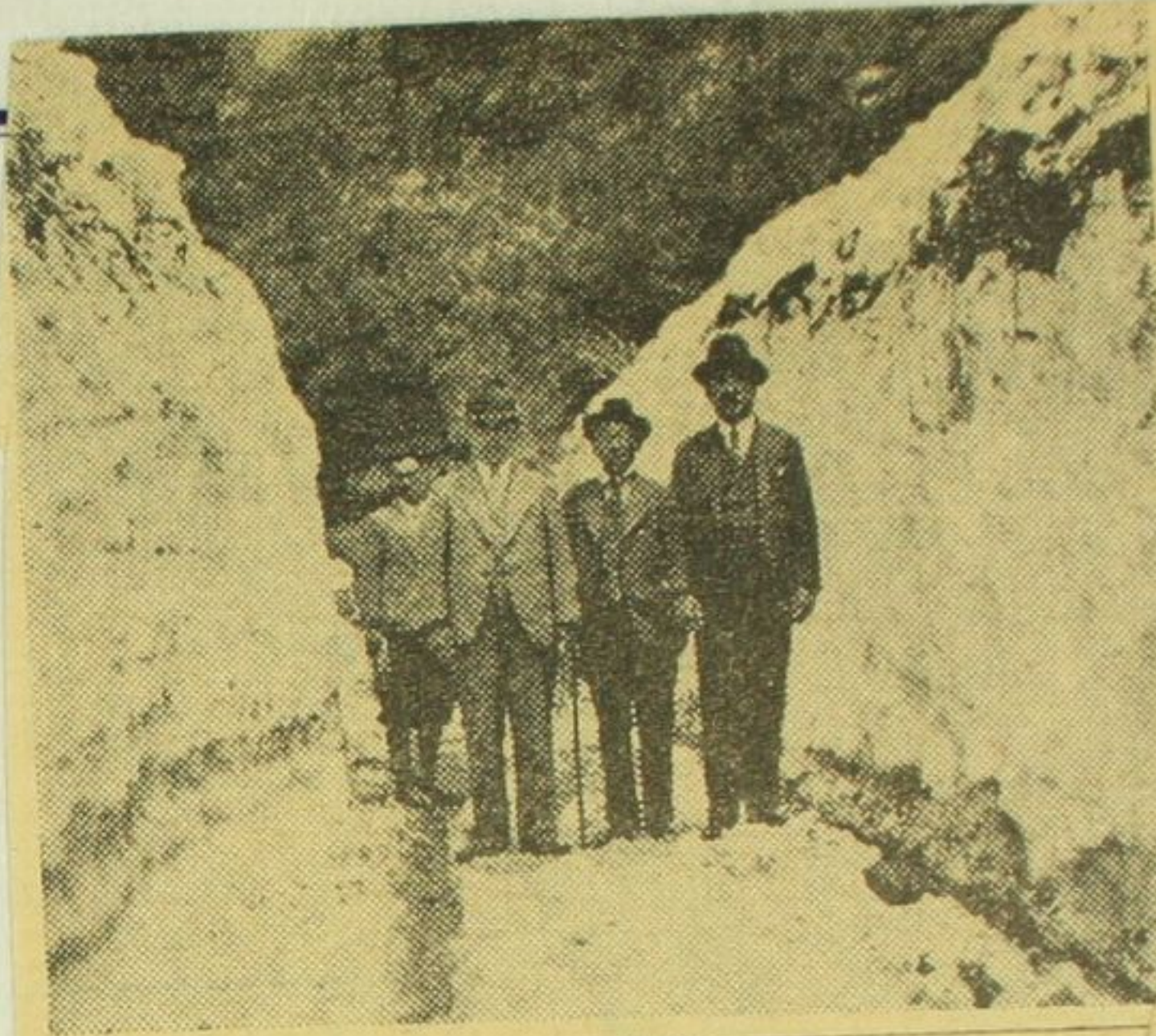
僕の心臓はおどつた。彼は時時、彼女の側にゐる少女が何も見ることのできないほどからだを前に寄せかけた。或時はからだを引こめたり、ある時は椅子に凭れかかつた。そして彼女に何か言ふのだ。僕は齒ぎしりして見てゐた。涙が眼に溢れて来たが、それはあんまり見つけてゐたから結果で、その晩中まだ泣くことなど出来はしなかつた。——そのうち僕は君の事を考へた。本當に君のことを考へたんだ。そして家に歸つて君に手紙を書かうと思つた。だが、その光景を見ないでゐられなかつた。僕は残つてゐた。神よ、神よ！僕は何かだつてあの時に彼女を辯護しなければならなかつたのだらうか。さうだ。僕は彼女を辯護した。いかに彼女が彼に冷やかに應對したか、いかに彼女が彼から身を避けたか、いかに彼女が彼に返答もしなかつたか、いかに彼女が彼に困らされてゐるやうに見えたか、僕はそれらのことを見るやうに思つた。だが、ああ、オペラグラスは僕の心ほど僕に阿諛してくれなかつた。僕はそれらのことを見たいと思つたのだ！おお！神よ、たとひ僕がさうしたことを見たとしても、彼女の僕に對する愛がその事情を起した最後の原因ではなかつたらう。

九時を打つた。あの呪はれた芝居はもう終るのだ。あんな芝居は呪はれるがよい。僕の話が続けよう。僕は十五分間そのやうにして腰かけてゐた。そして、初の五分間に見たことのほか何も見なかつた。突然發熱が烈しく僕を捉へた。僕はその瞬間に死ぬと思つた。僕は眼鏡を隣人に返して走つた。そしてもう家から外には出なかつた。——そして二時間前から君にこれを書いてゐる。僕ほどの資力あり、將來の見込あり長所もありながら、僕より不幸な男を君が知つてゐるならその名を僕に言つてくれ。そしたら僕はだまらう。僕は一晩中泣かうとしたが駄目だつた。齒ががちがちいふだけで、こんなに齒ぎりしする時は泣けないものだ。」

x
x
x
x
x

新緑の夏來ても 東頸の雪五六尺

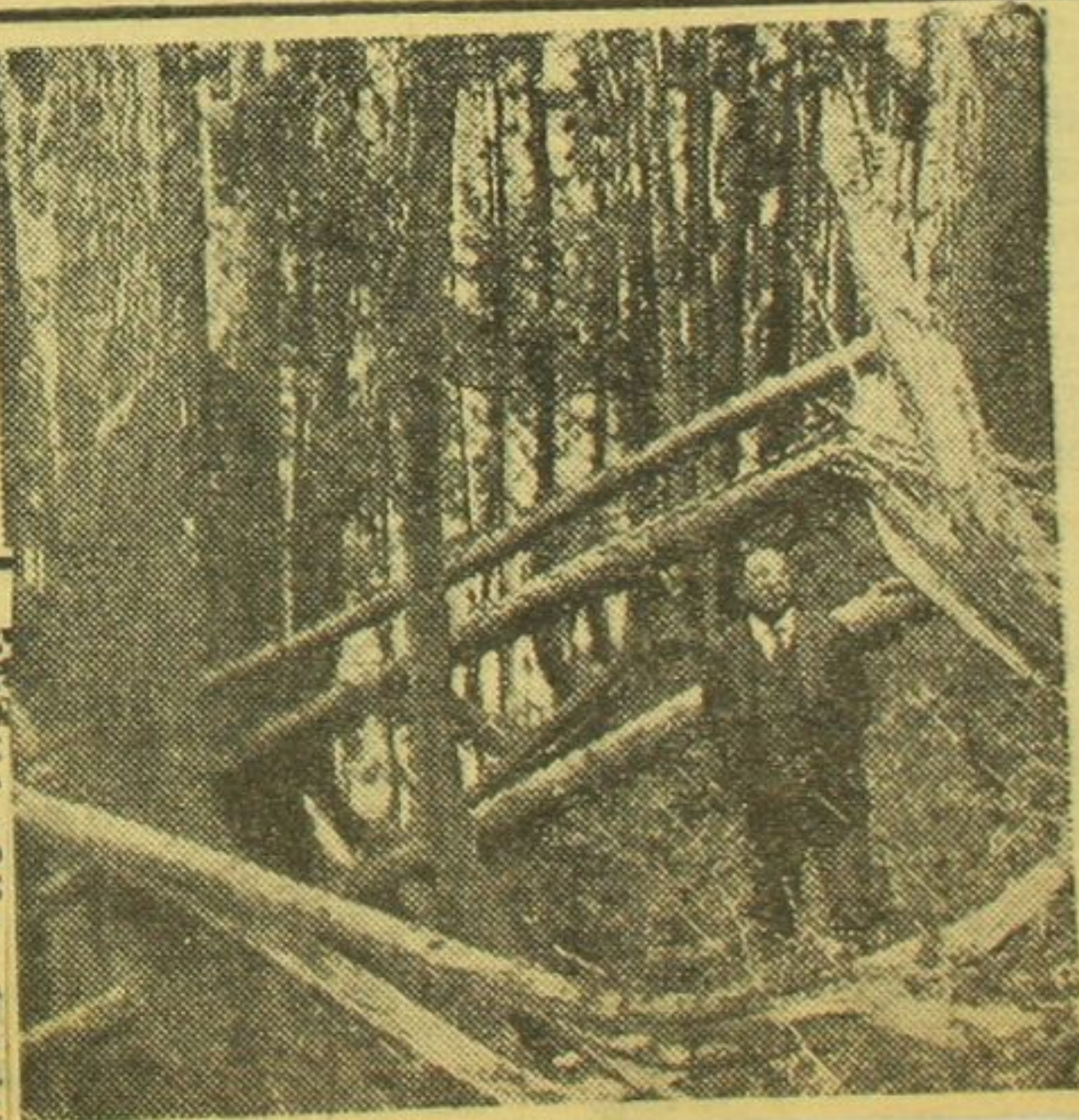
雪害対策調査官舌を捲く



大蔵省海池事務官、農林省林野課
雨森技師等に本職を兼ねて約
三十名に上る雪害調査の一行は十
四日東頸城から大津市の駅道を
通て十日町に入り各方面の陳情を
受けたが、氏は交々語る
日本一の深雪地であるといふこ
とは聞いて来たし二月頃上越線
を通つたことがあるので大体の
想像はつかぬでもなかつたが今
頃に猶五六尺の雪を削らねば車
が通らないのを見て、矢張り見
なければ住んで見なければとの
實感が湧いて自分の雪に對する
認識を訂正の要を感じた雪害地
の救済には第二準備金でなんと
かすることに成るものと思ふ
寫眞は調査員來越の爲め漸く開
通した縣道大伏線で

自然の上にも 残酷な深雪

山林の大木多數倒さる



魚沼深雪地方の山林は雪尺余の
木が折うして果々倒れてゐる。
四日同地を助れた大蔵、農林兩
の調査員もその猛烈に感然とし
今年の雪はどういふものか御木

り比較的太いものがよく折られた
やうだと訴へてゐた。調査員もあつた
くらゐでその重さは人間生活の上
のみでなくかうした自然の上にも
怖い害が至るところに見られる
(寫眞は中魚中條村字五軒新田の
松林)

標原製

機上からバラ撒いた投降票
我が軍の包圍下に瀕滅の運命
にある徐州十萬の敵軍に頭上か
らバラ撒かれて居る投降票「此の票を換へ来るものは敵兵と看做さず優遇する」とあるので敵
兵達は引張風の奪ひ合はぬ司令部では周章狼狽「投降票を所持せるものは殺殺する」と嚴命し
てゐる(寫眞は投降票)

来！

来！

投降票

一、投降者携
帶此票未
至日軍
二、日軍對於
携帶此票
者不但不
能做敵兵
而且優禮
之矣

日本軍

来！

教育機關としての私塾

市島春城

(小月その本及び友人)

統制ある教育法の下に大中小の學校が起り、全國にそれが普及して國民教育が行届いた今日、翻つてそれが無つた當時の教育法を追懐すると、特に隔世の感がある。當時とても、教育は行はれがた、それは随分亂脈のことであつた。各藩に於てはそれ／＼藩學があつたが、それは主として藩士の子弟を教育する機關であつた。民間では兒童教育に寺子屋があつて読み書きを教へた。高級の教育には最高學府として江戸に昌平學校があり、心あるものはそれに學んだが、多くは私塾に學んだ、私塾と云ひ家塾と云ひ或は村塾などいろ／＼の名はあつたが皆な同じもので、徳川期に於ける國民教育の大切な補助機關であつた。大概當時相當の學者の存在してゐる所には、其學者が家塾を開いて

子弟を教へた。例へば中國筋の菅茶山の廉塾などは、頼山陽が一時塾頭となつたので、地方ながら今も知られてゐる。江戸は勿論學者の淵藪であつたから、多くの家塾私塾があつた。そして維新後までも成立してゐた。乃ち安井息軒の塾、芳野金陵の塾(二代目は芳野世經)三島中洲の二松學舎などがそれである。洋學の私塾には中村敬宇の同人社尺新八の塾の外に最も大きいものに福澤の慶應義塾がある。醫學の塾には長谷川泰の濟生學舎、女流の塾には跡見や棚橋の塾、大阪では藤澤南岳の塾、緒方洪庵の醫塾など一々數ふるに違がない。地方に在つて學問に志あるものは上京して以上の私塾に就たものは無論多かつたが、地方に於ても學者のある所には自然私塾があつた。

大抵當時地方の富饒の家の主人は學識があつたので、郷黨のため教育奉仕で塾を開いたから、好學の徒はそれに入つて學ぶものが多かつた。尤も私塾家塾と云はずおのづから同様の事をやつたものもあつた。乃ち富饒の素封家などは、近傍の學者を迎へて、それを今日言ふ家庭教師として、己れの子弟を教育せしむる傍ら、近郷の學に志あるものを延いて學ばしめた。これも一種の私塾と見られないこともない。此の迎へられた學者は二年も三年と其家の客となつて、親族音ならぬ關係を生じたものもある。自分の郷國越後などは富豪が多いので、自然其家の主人に學問があり、大きな家塾を開いたものも二三あつた。殊に自分の郷里は天領であつた關係から、偶々好學の代官が來て郷黨を教育したことが因縁となり稍々組織立つた教育が行はれた。有志の餘金で學舎まで設けてそれを弘業館と名づけ、自分も幼少の頃は其の教育を受けた。

私塾は或余外まらつたことと、

禍を招致した。

私塾は右の如く概ね小規模であつたから、先生自から個々の塾生に教へた。塾頭のある所では、先生を手傳つたが、其教へ方はよく届いた。講釋でも輪講でも作文詩などでも、先生が親身に教へたから、門生もシミ／＼其の教を會得することが出來た。此點からすると一堂に幾十の學徒を會して一齊に教授するのは甚だ趣が異つて教育が徹底した。殊に先生が全く營利を離れて教へたから、眞の師弟關係が生じた。門人は長く師恩を忘れなかつた。乃ち倫理的效果は確かに私塾教育に多かつた。今の多數を會しての教育は種々なる教師がそれ／＼の科目を受け持ち、學生の個性はなんであらうとそんなに頓著なく、唯だ講堂で一ト通り講義をすれば、あとは路人同様と云ふ始末だから、師弟の情誼も薄く、兎もすると月謝で學問購ふと云ふやうな觀念を持つものすらあり、倫理關係は起りやうが、支那では管內教育と云ふ

教育機關としての私塾

弟子の如きものであるから、其の教育の効果も他の藝術同様著しいものがあつた譯だ。

ふもよまらぬ教育と云ふことと云へ、莫慮では種々の學派もあつ

沈滞して舊日の觀が無い。教師の性格が如何に教育に影響あるかは、此の實例に就ても見ることが出來よう。

幕府の末期には一世の風氣が漸やく幕政を忌むこととなる、それが

教育機關としての私塾

市島春城

（五月十日）

統制ある教育法の下に大中小の學校が起り、全國にそれが普及して國民教育が行届いた今日、顧つてそれが無つた當時の教育法を追懐すると、特に隔世の感がある。當時とても、教育は行はれがた、それは随分亂脈のことであつた。各藩に於てはそれ／＼藩學があつたが、それは随分主として藩士の子弟を教育する機關であつた。民間では兒童教育に寺子屋があつて読み書きを教へた。高級の教育には最高學府として江戸に昌平學校があり、心あるものはそれに學んだが、多くは私塾に學んだ、私塾と云ひ家塾と云ひ或は村塾などいろ／＼の名はあつたが皆な同じもので、徳川期に於ける國民教育の大切な補助機關であつた。大概當時相當の學者の存在してゐる所には、其學者が家塾を開いて

子弟を教へた。例へば中國筋の菅茶山の廉塾などは、頼山陽が一時塾頭となつたので、地方ながら今も知られてゐる。江戸は勿論學者の淵藪であつたから、多くの家塾私塾があつた。そして維新後までも成立してゐた。乃ち安井息軒の塾、芳野金陵の塾（二代目は芳野世經）三島中洲の二松學舎などがそれである。洋學の私塾には中村敬宇の同人社尺新八の塾の外に最も大きいものに福澤の慶應義塾がある。醫學の塾には長谷川泰の濟生學舎、女流の塾には跡見や棚橋の塾、大阪では藤澤南岳の塾、緒方洪庵の醫塾など一々數ふるに遑がない。地方に在つて學問に志あるものは上京して以上の私塾に就たものは無論多かつたが、地方に於ても學者のある所には自然私塾があつた。

禍を招致した。

大抵當時地方の富饒の家の主人は學識があつたので、郷黨のため教育奉仕で塾を開いたから、好學の徒はそれに入つて學ぶものが多かつた。尤も私塾家塾と云はずおのづから同様の事をやつたものもあつた。乃ち富饒の素封家などは、近傍の學者を迎へて、それを今日言ふ家庭教師として、己れの子弟を教育せしむる傍ら、近郷の學に志あるものを延いて學ばしめた。これも一種の私塾と見られないこともない。此の迎へられた學者は二年も三年と其家の客となつて、親族當ならぬ關係を生じたものもある。自分の郷國越後などは富豪が多いので、自然其家の主人に學問があり、大きな家塾を開いたものも二三あつた。殊に自分の郷里は天領であつた關係から、偶々好學の代官が來て郷黨を教育したことが因縁となり稍々組織立つた教育が行はれた。有志の餘金で學舎まで設けてそれを弘業館と名づけ、自分も幼少の頃は其の教育を受けた。

私塾は或除外はあつたにせよ、概して極めて小規模で、塾生は多く家庭の人として取扱はれた。隨つて束脩も月謝もなく、食費すら取らなかつた塾もある。遠來の塾生は寄宿をしたが、特に寄宿舎の設けがあつた譯でなく、宛がら學僕に如く家庭の人として、掃除位の家務を助けた。素より家塾は營利を目的とするもので無かつた。勿論多數の學徒を收容した塾では束脩や月謝や食費を取つたものもあるが、維新後まで存続した東京の家塾の中には下宿屋に代用されたものもあつた。貧生は費用がかゝらぬ所から之れに宿して勝手なことをやつた、これは家塾の類廢で偶々規模が大きく寄宿舎の設備があつたので、却て此

教育機關としての私塾

私塾は右の如く概ね小規模であつたから、先生自から個々の塾生に教へた。塾頭のある所では、先生を手傳つたが、其教へ方はよく届いた。講釋でも輪講でも作文詩などでも、先生が親身に教へたから、門生もシミ／＼其の教を會得することが出來た。此點からすると一堂に幾十の學徒を會して一齊に教授するのは甚だ趣が異つて教育が徹底した。殊に先生が全く營利を離れて教へたから、眞の師弟關係が生じた。門人は長く師恩を忘れなかつた。乃ち倫理的効果は確かに私塾教育に多かつた。今の多數を會しての教育は種々なる教師がそれ／＼の科目を受け持ち、學生の個性はなんであらうとそんなに頓著なく、唯だ講堂で一ト通り講義をすれば、あとは路人同様と云ふ始末だから、師弟の情誼も薄く、兎もすると月謝で學問購ふと云ふやうな觀念を持つものすらあり、倫理關係は起りやうが。支那では營利的教育を皮肉つて學店と名づけてゐるが、今の學校教育は惡ざまに云へば其趣が無いでもない。

昔し百般の藝術に師弟の關係がやかましく、其の奥義を教はるまでには、多くの歲月を要し苦辛の修養を積まねばならなかつたが、門人の内に其家庭に生活することを許されたものを内弟子と云うた。此内弟子こそ師の身邊につき纏ひ、日常師の動靜を見、師に親炙の結果、師の教を受くること、他の門人に比すれば甚だ多く、成功者は内弟子に多かつたので、一般の門人は内弟子を羨んだ。實は師に親炙の機會が多ければ斯る利得がある筈である。私塾に於ける塾生も云はゞ内

弟子の如きものであるから、其の教育の効果も他の藝術同様著しいものがあつた譯だ。

私塾は専ら漢學教育をやつたとは云へ、漢學には種々の學派もあつた。亦漢學の外に皇學を主とした塾もあつた。實は混然たるものであつたが、塾の中心は言ふまでもなく統率者たる塾主で、その人には主張があり又特殊の見識もあつて、それがおのづから塾風をなした。勿論塾主の性格もさまざまで、奇抜な人もあり温籍の人もあり、謹嚴の人磊落の人と其性格は異つても、多くは何等拘束を受けない民間の自由人であつたから、塾生も自由の教育を受けた。當時の學科は今日の如く複雑廣汎で無つたから、學徒は深く一科を修め、隨つて圖ぬけた逸材も出た。當時修業に辛苦が必隨條件であつたので學徒は辛酸を嘗めることを意に介しなかつた。彼等は此の點に於て硬教育を受けた。此の教育は心膽を鍊るにも效があつた。當時は官祿を受くる人を造るよりも獨歩の人を造ることが主であり、技師的人物を造るよりも經世的大器を造ることに意を用ひた。感傷的女性的の性格が排斥せられて線の太い人間が養成された。血氣の青年は往々軌道を逸する腕白もやつたが、元氣旺盛で他の塾生と喧嘩もやつた。悲歌慷慨は彼等の最も好む所で、英雄を崇拜し、俠客を喜び、義の爲めには身を犠牲にするの道義心もあつた。如斯は自由人の私塾に特有の薰陶とも云へる。自分等の經驗によるも、帝國大學の當期には教師は皆な自由人であつて往々學生と結托して相剋的運動を爲すこともあつたので、それを取締るため教授を官吏としてから、紛争は絶えたが、學生の元氣はその後

沈滞して舊日の觀が無い。教師の性格が如何に教育に影響あるかは、此の實例に就ても見ることが出來よう。

幕府の末期には一世の風氣が漸やく幕政を忌むこととなる、それが獨立獨歩のあらゆる私塾に反映して慨世憂國の氣が漲り、そこへ外國との接觸から生じた國難が拍車をかけて、所謂志士なるものが天下に満ちた。そして其温床は實に私塾であつたのである。彼の松下村塾の如き微々たる小塾が、多く有爲の人物を産み出し、明治の新天地に大なる寄與をしたことは何人も知る所だが、これなども吉田松陰の如き大人物の薰陶に由ることではあるが、當時の風雲に駕した好例であると云はざるを得ぬ。

井然たる教育法が全國に布かれた今日、振り返つて舊時の家塾や私塾の散漫なる教育を見ると、優劣の比較は愚の至りであるが、併し長短はどの教育にも存在する、今の國民教育は行届いてもゐるが、其の造就し出す人物は皆技師的人物である、技師的人物は勿論今の世の中に必要であるから、之れを排斥するのではないが、技師を作るの教育は經世的人材を造るの法ではない。人材教育は技師を養成する教育を超越するもので無ればならぬ。此點に於て今の教育法に缺陷がある、舊時の私塾教育は弊なしとは言はぬが、人物を造就するには却つて一長があつたと信ずる。と云うても今更私塾制度の復興を主張するものでない。併し私塾制度の長は採つて以つて人材教育の志料とし、一般國民教育の外に別に造士教育を經營するの必要がありと信ずる。

一四 瓜盗人

瓜主「罷出でたる者は、此邊の耕作人でござる。當年は瓜を作つてござるが、身共が仕合で殊の外好う出来てござる。今日は畑へ見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて参らうと存ずる。誠に此邊方々に瓜を作つてはござれど、某が様なはござらぬ。畑へは毎日見舞はねばならぬ。是が身共の畑ぢや。やれやれ嬉しや、夥しう生つた。や、思ひ出した。何時も畑へ獸がついて瓜を荒す。案山子を作つて置かう。(ト脇座の所に案山子を作り)や、一段と好い。明日見舞うて臍落を取らう。(ト樂屋へ入る。)

瓜盗人「これは此邊に住居致す者でござる。今日所用ござつて、山一つ彼方へ参つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。

私に御目を懸けらるる御方に、瓜好きな人がござる程に、今夜あれへ参つて、四つ五つ取つて参らうと存ずる。此邊にあつたが、どの畑ぢや知らぬ。お、これぢや。先づ垣杭を抜かう。(ト垣を二三本抜く態をして、腰をかめ畑へはひる。)さあ畑へははひつたが、番の者は無いかしらぬ。あらば聲を立てうが、無いものぢや。晝見たれば瓜がいかい事見えたが、夜ぢやによつて見えぬ。此が瓜さうな。いや、瓜かと思つたれば枯葉ぢや。(ト彼處此處を捜して見て)瓜に當らぬ。此様な事では瓜を取ることはなるまい。何としたものであらう。や、思ひ出した。夜瓜を取るには轉びをうつて取るものぢやと聞いた。さらばこれから轉びを打つて見よう。(ト床上を轉がり行き)さればこそ、枕のやうに當つた。(枕の時寝てゐて笑ふ。一つ潰れたわと云ふ)扱も扱も好い匂ぢや。

此處にもあるわ。後の方にもあつた。此様にして取らば如何程なりとも取られう。(下次第に脇座の方へ轉び行き、その案山子に轉びかかり、人かと思つて大に肝を潰し、平伏して)眞平お許されませ。私は盗人ではござりませぬ。こなたの畑が、あまり見事に瓜が生りましたと承りまして、見物に参りました。命の儀を御許されませ。瓜二つ三つ取りましてござる。皆返しませう。御免なつて下さりませ。申し、物を仰せられねば何とも迷惑でござる。重ねては最早参りますまい程に、平に御許させられて、歸させられて下されませや。申し、なう。(ト手を上げて、暗き時物を見る態して、案山子を見附て)是はいかな事。扱も扱もよい肝を潰いた。瓜主かと思つて、いくせの事を思ひ、迷惑した。此様によらもよらも上手に作つたものぢや。其儘人のやうな。獸が見たらば

其の光景が餘りに美しかつたので、私は之を説明するよりも、見た儘の光景を憶ひ出すのを樂しみとしてゐる。これを見たのは久しい以前であるにも拘らず、其の印象は今猶ありありと私の記憶に存し、光背の色彩の如きも鮮明に心に残つてゐる。

惠心の描いたものに山越彌陀と稱する圖がある。あれは惠心が叡山の上で見た光景を藝術化したものであらうが、私が見た雪中如來は、其の姿といひ背景といひ、山越彌陀の圖よりも、もう少し神祕・幽玄の情趣のあるものであつた。山を靈ならしめるものは種々あるが、中にも雪中如來の如きは、畫龍に眼睛を點ずる如く、山靈を眼前に活躍せしめるものである。(渡り鳥日記)

惠心
天台宗の僧
諱は源信
俗姓卜部氏
寛仁元年(一〇七〇)
歿
年七十六
叡山
比叡山
京都市の東北に
あり頂上に延暦
寺がある

肝を潰いて、あたりへは近寄るまい。此奴故思ひもよらぬ肝を潰いた。重ねて来る事ではなし、折こかいて退けう。腹の立つことぢや。瓜蔓も引き撈つて退けう。(ト案山子を倒し、瓜蔓を引抜く態をして) 好い仕合。急いで戻らう。(ト後見座にくつろぐ)

瓜主「昨日瓜畑へ参つたが、未だ臍落が致さなんだ。今日は大方臍落がござらう程に、取つて参らう。内の者を遣れば瓜を盗みをるによつて、某の毎日参らねばならぬ。これは如何なこと。散々に畑を荒いて置いた。是は扱、瓜蔓も引き撈つて置きをつた。その上案山子も打倒しておきをつた。これはいかさま獣の業ではない。瓜盗人め、ゆふべうせたものであらう。扱も扱も腹の立つ事ぢや。今夜は某が案山子に成つて捕へう。定めてゆふべので味を得て、又今夜も取りに参らぬことはあるまい。

(ト以前の案山子の様に、烏帽子を着、面をかぶり、左に綱、右に竹の杖を持ち、床几に腰かけてゐる。)

盗人「餘所へ物を遣ろとも、後前の分別して遣る事ぢや。盗んだ瓜を、さる御目を懸けらるる方へ進上いたしたれば、扱も好い瓜ぢや。これは其方が手作かと仰せられたによつて、なかなか、私の手作でござると申したれば、扱も好い瓜ぢや。近頃無心なれども、客があるほどに、瓜をま四つ五つくらいと仰せらるる。何とも返事の致しやうが無うて、畏つてござると申した。某の手作でござると申したによつて、今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜あれへ行て、瓜を取つて參らうと存ずる。此様に又參らうとは知らいで、瓜畑を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬ事はあるまい。見舞うたらば腹をたてて、今夜

惠心

天台宗の僧
諱は源信
俗姓卜部氏
寛仁元年(一〇七〇)
歿
年七十六
叡山
比叡山
京都市の東北に
あり頂上に延暦
寺がある

其の光景が餘りに美しかつたので、私は之を説明するよりも、見た儘の光景を憶ひ出すのを楽しみとしてゐる。これを見たのは久しい以前であるにも拘らず、其の印象は今猶ありありと私の記憶に存し、光背の色彩の如きも鮮明に心に残つてゐる。

惠心の描いたものに山越彌陀と稱する圖がある。あれは惠心が叡山の上で見た光景を藝術化したものであらうが、私の見た雪中如來は、其の姿といひ背景といひ、山越彌陀の圖よりも、もう少し神秘・幽玄の情趣のあるものであつた。山を靈ならしめるものは種々あるが、中にも雪中如來の如きは、畫龍に眼睛を點ずる如く、山靈を眼前に活躍せしめるものである。(渡り鳥日記)

寺あり都山
京比山
七年
元七
寛文
信天
源宗
は古
姓は
仁元
七
山
比
京
都
あり
寺

は番をして居ることもあらう。何とやら胸騒がして氣遣な。
あ、此畠ぢや。いや、ゆふべ垣を破つておいたが其儘ある。定め
て瓜主が見舞はなんだものであらう。見舞うたらば此様にし
てはおくまい。さればこそ、撈つておいた瓜蔓が其儘にある。
嬉しい事ぢや。(トそろそろ案山子の側へ寄り、見附けて大に肝を潰し、
是は如何な事、不思議な事ぢや。ゆふべ案山子を打倒いて置い
たが、又立てて置いた。是は瓜主が見舞はぬではない。合點が
いかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畑
を見舞うて来いと云ひ附けたによつて、見舞はしたれども、案山
子ばかり立てて置いて、垣も其儘で戻つたものぢやらう。總じ
て下々は、どれも此様な事ぢや。ことにこの案山子は、ゆふべよ
りは猶好う人に似た。(トここにて仕様あり、下に居て、うそぶきの面へ

標原製

指さしなどして笑うて、其儘人ぢや。某をきつと見てをる。いや、思ひ出した。いつも盆になれば、若い衆が踊をせらるる。當年は中踊なかまどに鬼が責める處をせうと云はれた。幸の事、この案山子をば罪人にして、某が鬼に成つて責めて見よう。よい杖もある。急いで責めて見よう。『如何に罪人。地獄遠きに非ず。極樂遙なり。急げとこそ。』(下綱を持ち杖を上げて、罪人を呵責する態をする。)先づ鬼の責はこれで好からう。案山子ぢやによつて責め力がない。さりながら、これも鬪むであらう。某が罪人に取り當る事もあらう。この案山子を鬼にして、身共が罪人に成つて、責められて見よう。幸好い引綱がある。(下綱の端を持ち、案山子に背を向けて)『あら悲しや。これ程参り候に、さのみな御責め候ひそ。行けど行かれぬ死出の山。行かんとすれば引き止む。止れんば

其の光景が餘りに美しかつたので、私は之を説明するよりも、見た儘の光景を憶ひ出すのを楽しみとしてゐる。これを見たのは久しい以前であるにも拘らず、其の印象は今猶ありありと私の記憶に存し、光背の色彩の如きも鮮明に心に残つてゐる。

惠心の描いたものに山越彌陀と稱する圖がある。あれは惠心が叡山の上で見た光景を藝術化したものであらうが、私の見た雲中如來は、其の姿といひ背景といひ、山越彌陀の圖よりも、もう少し神祕幽玄の情趣のあるものであつた。山を靈ならしめるものは種々あるが、中にも雲中如來の如きは、畫龍に眼睛を點ずる如く、山靈を眼前に活躍せしめるものである。(渡り鳥日記)

惠心

天台宗の僧

諱は源信

俗姓卜部氏

寛仁元年(一〇七〇)

歿

年七十六

叡山

比叡山

京都市の東北に

あり頂上に延暦

寺がある

寺あり
京の
比叡山
山七
六
寛仁
寛仁
天
心

杖でてうと打つ。』トいふ時、案山子は杖を上げて瓜盗人を打つ。盗人肝を
つぶし、これは如何な事。何者やら飛礫つぱくを打つた。あたりに人
は無いが、不思議な事ぢや。何者が打つたぞ知らぬ。合點がい
かぬ。今この綱を肩にかけたれば打つたが、(ト綱を引いて見る。案
山子それにつれて杖を上げる。)はあ、扱も扱も。好う拵へたものぢ
や。此綱を引けば上る。緩めれば下る。ばつたり、ばつたり、ば
つたり。扱も扱もをかしい事かな。百姓は賢いものぢや。こ
れなれば氣づかひない。さらばも一度責められて見よう。『行
けど行かれぬ死出の山。行かんとすれば引止む。止れんば。』
(トいふ時、杖にてうと打ち、直ぐに面をとり、)
瓜主「がつき奴。遣るまいぞ、遣るまいぞ。瓜盗人「あら悲しや。
許させられい、許させられい。(ト逃げて退場。)

(續狂言記)

藤原製

谷口燕村
與謝燕村とも言
ふ
俳人
攝津國(大阪府)
の人
天明三年(一八三三)
歿
年六十八

一五 青鷺

谷口燕村

春雨や小磯の小貝ぬるるほど
春の海ひねもすのたりのたりかな
菜の花や月は東に日は西に
ほととぎす平安城をすぢかひに
牡丹散つてうちかさなりぬ二三片
さみだれや大河を前に家二軒
夕風や水青鷺の脛を打つ
涼しさや鐘をはなるる鐘の聲

惠心
天台宗の僧
諱は源信
俗姓卜部氏
寛仁元年(一〇七〇)
歿
年七十六
叡山
比叡山
京都市の東北に
あり頂上に延暦
寺がある

其の光景が餘りに美しかつたので、私は之を説明するよりも、見た儘の光景を憶ひ出すのを楽しみとしてゐる。これを見たのは久しい以前であるにも拘らず、其の印象は今猶ありありと私の記憶に存し、光背の色彩の如きも鮮明に心に残つてゐる。惠心の描いたものに山越彌陀と稱する圖がある。あれは惠心が叡山の上で見た光景を藝術化したものであらうが、私が見た雲中如來は、其の姿といひ背景といひ、山越彌陀の圖よりも、もう少し神祕・幽玄の情趣のあるものであつた。山を靈ならしめるものは種々あるが、中にも雲中如來の如きは、畫龍に眼睛を點ずる如く、山靈を眼前に活躍せしめるものである。(渡り鳥日記)

天然睿智者，能窮真理，發前人未發義，名高於一時，
印流於萬世，投卷慨然，自奮曰：我果下愚乎，宜勤勉
可以補萬一，君果不然乎，蓋自進任其責，於是乎益
勉記覽，字稍成，乃始匿名著書，題曰政事三論，一時
傳播世上，時人以為曼士非德，甘田，但寧著，蓋三氏
皆當時大家也，然便不敢自多，日夜刻意涉獵，古
今能辨析鉅錄數十年如一日，字益成，苦思焦慮，卒
大成利害之說，表明立法之要，其論沉行於世，雖奴
婢嚙，儘至唱最大數，最大幸福，說感哉，享年八十四
沒後之政事家，概皆祖述先生。而近時英國制度，釐

莫南子

革其振起之功，恆有力云。
墨子曰：偉矣哉，勤勉之能成大業也。我於便單事有
和之感，世之夙興夜寐，孜孜不倦者，何限。而事不能
全其功者，何也。蓋因一片至誠，存與不存於胸中耳。
古曰：至誠如神，嗚呼信矣。

文章四年生

壬午三月

山田一郎

稿

初夏早起

庭前綠蘚淨無埃階下兩三標有梅竹筍巧穿蕨穴

以綠鮮
知梅霖妙

實景如画 敬字讀

出槿花斜上女牆來

斜

法孝四年生

乞正

山田喜之助

解

便草小傳は文学科学期試文と云て山田一郎
君の爲めに余此代作せし者匆卒此稿なる事は
一見明白

ふ云て一即君此字字と草畫此誤多く論贊に余
此類多る墨痴子と其儘心附可つて更めさる
所特下一笑を辱し初夏早起の一絶は余此病中
の作として一即君此草字と類し多る者斜の字畫
此字皆誤る不用意無頓着の様挿入し評語朱
批の故中村敦宇先生此草に成る嗚呼此とる片

紙恩師畏友此面影の忍はるこそ申あゝ起

壬寅四月

山田喜之助



宇米古(浅草三丁目所載)

そば屋豊嶋庵の木印

丸山季夫

明治五年の秋に、丸山作樂が國憲を犯すの罪に問はれて、遂に終身禁獄の身となつた。元來恒産の無い丸山の事だから家族がその生活を支ゆるために下宿屋を営み、やがて馬喰町四丁目で蕎麥屋を開業した。

作樂の妻宇米古は、常陸笠間藩士棚谷桂陰の女で、そんな俗業は知るべくも無いので、藤兵衛といふ老人を顧問格として、毎夜々々營業上のコツを教へられ、また一錢二錢の有難さを説かれたのであつた。



ある時馬方風の客が煙草入を忘れて行つた、宇米古はこれを見て往來に出て、「オイ〜煙草入を忘れたよ」と呼歸したが、あとで藤兵衛爺さんが「オイ〜とは何事です」と大笑ひしたといふ珍談もあつたが、やがてその店も他人に譲つて、その父と共に作樂の入獄してゐた長崎に移つた。

この印はその蕎麥屋の木印で、棚谷桂陰の字入れであるとい傳へ。今もこの印を包むのに、當時の暖簾のきれ……「生蕎麥」の生字の所……を用ひてゐる。

宇米古は大正十年九月十四日七十八歳で歿したが、その歌集を「雪間の宇米」といひ、桂陰には「國史攬要」「桂陰詩集」等の著がある。

掲載の木印は、現に丸山家の秘藏であるのを、今回特にその一冊々々に押捺することを許容されたるを謝す(編者)



人齋書と齋書

★
十のそ
★

東京の五月
ホームライフ

客間と兼帯

市島 春城

自分の書齋は客間兼帯です。読書客に留ま
つかへないと極る以上は、このほうが自他の
ため便利です。客の來ることに書齋から出る
のも厄介だし、出るまでに多少の時間のかゝ
るのは、客に氣の毒である。かゝる次第で自分
は専用の書齋をもたないが、かつて別荘に作
つて見た書齋をいふと、實はあまり用をなさ
なかつた。附け加へるがすべて書齋には一種
の形式があり、机案の背後に書架のあるのが
通例だが、自分はそれにならふことを欲しな
い。深い意味はないが、何となく書物屋の店
頭に番頭が坐して居るような氣がしておもし
ろくないからだ【寫眞は書齋における市島
氏】著述家、早稻田大學理事

世 貞 林 小 ラメカ

藤原製



至正六年春二月為
叔大長友作大疾

元 黃子久筆 山水圖 笹川鹿堂氏藏

